超野菜人、魔法世界に参る

天孤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
超野菜人、魔法世界に参る

【Ｎコード】
Ｎ２７９５Ｔ

【作者名】
天孤

【あらすじ】
ある朝のこと……男子高校生・青海（おうみ）流（ながれ）は森の中にいた。なぜ森の中にいるのか、何のためにこんな所に自分はいるのか、謎は深まるばかり。しょーじき言おう、面倒だ。クソォ！　神よ！　俺は何をした！　呪ってやろうか、このヤロォー！　しかし流はシッポを携えて、物語に巻き込まれていく。そんなお話――――…。

第1話　オッス！　オラ、異世界人！（前書き）

ネギま×ドラゴンボールです。
といってもドラゴンボールは能力だけ。
主はネギまです。

第1話　オッス！　オラ、異世界人！

―――――――――――――――――side？？？

拝啓　母上　父上

現在こちらの方では新緑の香りがすがすがしい季節になってきました。

そちらの方はいかがでしょうか？　そちらも爽やかな春風が吹いていることでしょう。

昨年からの高校生活も楽しく、部活や勉強の方にも力いっぱい頑張っています。

いますというより、いましたの方がしっくり来るでしょうか……。

なぜかと言うと、自分……迷子になりました。

……

……

……

……

……

……

……

――さて、どう説明しようか。

とりあえず自分の名前と、その他のことを説明するとしようか。
まず俺の名前だが、性は青海（おうみ）、名は流（ながれ）。
少し水関係多くね？　みたいな感じもするが、そこんとこは仕方ない。
元々住んでいたところが水の豊富な土地だったから、こういう名前が多かった。

まぁそれは置いといて、名前以外の説明しよう。
年齢は１７歳。高校２年生で、部活は探検部に所属。
勉強はそこそこ、容姿は少しモテるぐらいの普通な高校生だ。
ちなみに探検部とは色々な場所を探検して、体力、知識をつけていこうぜ！　みたいな部活だ。

中学までは家から学校に行っていたが、高校からは県外の学校だったので家から学校まで距離があり、そのため学校にある寮に住んでいた。

そして昨日。
部活も終わり、バイトも終わらせた俺は、ご飯を食べて風呂に入った後すぐに寝てしまった。
そういえば漫画の新刊読んでねーなー、とか思いながらも眠りについた俺は、起きると森の中にいた。

あ…ありのまま、起こった事を話すぜ！

『寮でぐっすり寝ていたと思ってたら、朝起きてみると森で寝てた』

な…何を言ってるのか、わからねーと思うが、俺も何が起こったのかわからなかった…。
超能力者だとか宇宙人だとか未来人だとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…。

――――閑話休題――――

少しの混乱もあったが、時間を置くと落ち着いてきた。
まぁ何が起こったのかは今更どうでもいい。
いまはこの森を抜けて、身の安全を確保しなければ……。
俺は早速行動と思い、地面に手をついて立ち上がろうと――――…

――――もふ♪

もふ？　おかしいな、こんな毛深そうな部分は俺の体には無いんだが……。
俺は気になり、触った部分を見てみるとそこには細長い毛の棒みたいなものがあった。
はて？　なんだろうか、これは。獣のシッポだろうか…。猿系っぽいよね。

とりあえず俺は立ち上がり、そのシッポを拾おうとした。
しかし立ち上がるとシッポが消えていた。
あるぇ？　何故無い……。
俺は左右上下見渡す。

右……ない。
左……ない。
上……あるわけない。
下……さっき見た。

何処にいった。

しかしシッポは無かったが、新たな発見があった。
体がちっちゃい。これでは某高校生探偵と一緒ではないか。
つーか何故気付かなかった、おれ。流石に鈍感すぎるぞ。
しかもなぜか寝巻きではなく、俺は山吹色の胴着を着ていた。

正直この服は見覚えしかない。亀仙流の胴着だろう、絶対。
だって胸元に亀のマークあるし。じゃあ背中にもマークがあるのだろうか？
そう思い背中を見ようと後ろを見ると、そこにはシッポがあった。

……。

……ふぅ。

――――あ…ありのまま、起こっ（ｒｙ

――――閑話休題――――

再度、混乱してしまったが、こればかりは仕方ない。
シッポが生えていて驚かない奴はいない。だって寝て起きたらシッポが生えてんだぜ？
しかも体ちっちゃいし。多分７、８歳ぐらい。俺にどうしろと…。

と、まぁシッポが生えてるのはよくわからんが、なんとなく予想はついた。

俺……サイヤ人化してね？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ということで修行だ。

え？　話がよくわからないって？

バカヤロー！　そんなもん男だからだろうが！

男なら（サイヤ人＝修行）の方程式が成り立つだろうが！

だってあの戦闘民族だぜ？　それになれたんなら修行するだろうが！

――――おれ……強くなったら『戦闘力…たったの5か…ゴミめ…』って言うんだ…。

別に死亡フラグでもなんでもないが、少し言ってみたい言葉だ。
とまぁその前に何かをするにしても、まずどこかに自分の住む拠点を探さないと。
あと食料の問題もあるし、この森に危険が無いとは言い切れない。
俺はとりあえず寝床を探すため、森の中を歩き出した…。

……

……

……

……

……

……

……

そして2時間後。
俺は森の中にいい感じの湖を見つけ、続けてその近くに洞窟も見つけた。、
食料である魚が獲れ、近くに寝床もある。こんな好条件の場所は他に無いだろう。

俺は洞窟に他の動物がいないかを確かめると、この洞窟を自分の寝床に決めた。
寝床を決めると、少し腹が減ってきた。これはサイヤ人としては死活問題だ。

俺はとりあえず魚を獲りに湖に行くことにした。

そして湖で魚を獲りにきた俺。
ここで問題が発生した。どうやって魚を獲るんだ……。

釣り？　竿ありません……。
モリ？　モリもありません……。
素手？　そんな…熊じゃあるまいし。

どうしようか……そういえば、テレビでやってたんだけど、川で石と石をぶつけて魚を気絶させるみたいな感じの獲り方があったような……。
とりあえず湖に繋がる川のほうに行ってみようかな。

俺は川のほうに来ると、魚のいるところを探してみた。
川の中には大きな魚や小さな魚、けっこうな数の魚がいた。
俺は川沿いに落ちていた大き目の石を探し出すと、それを川から突き出した石にぶつけてみた。
ガキンッと固いものがぶつかった音がすると、そこを泳いでいたであろう魚達がプカーっと浮かんできた。どうやら気絶しているようで、そのまま流れていっている。

俺は魚が流れていく前に、慌てて大量の魚を川岸の平らな岩の上に置いていく。
全部捕まえたところで、俺はこの魚を干物にすることにした。

別に今日中に食べれるとは思わないので、日持ちがいい干物の方がいいだろう。

俺は魚を捌くために、ナイフモドキを作ることにした。
まずは黒曜石のような固そうな石を探すと、それを岩に叩きつけ鋭そうな石を見つける。
その石を包丁を研ぐ時みたいにして、さらに鋭くして形を整える。
それを木の枝で挟んで、蔦で巻きつけるとナイフモドキの完成だ。

すこし歪な感じがするが、それは仕方ないのでモーマンタイ。
俺はそれを使い、さっそく魚の解体を始めた……。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そして1時間後。
やっとのことで全ての魚を捌いた俺は、あの洞窟へと戻ってきて

いた。
現在は昼過ぎて2、3時頃だろうか。お腹が空いて、背中にくっ付いてしまう。
早く数匹だけひらきにせず、内臓を取った状態で残しておいた魚を焼いて食おう。
俺は干物用の魚を、適当に作った魚を乾かす為の道具に置くと、魚を焼こうとした。

しかし火が無い。ということで、あの原始的な火起こしをやってみることにした。
俺は木と木を擦り合わせる。しかしご都合主義だろうか、凄く簡単についた。
俺は火種を藁っぽい奴に付けると、そこに拾ってきた枯れ木を放りこんでいく。
すると火は大きくなっていき、十分魚が焼けるぐらいには火が強くなった。

まぁ塩が無いが食べれるだけマシだろう。
俺は木の枝を刺した魚を火の近くの地面に立てる。
新鮮で獲れたての魚は、時間が経つほどいい匂いが増してくる。
数十分ほど焼き、表面に焦げ目がついてきたので、それを手にとりパクリとかぶりついた。
うまい！　と言いたいところだが、さすがに味気が少ない。
何処かに岩塩とか落ちてないかな。普通、落ちてねぇか……。
俺はその後焼いた魚を全部食べ終えると、一度洞窟の方に戻った。

………………………………………………

………………………………………

…………………………………

………………………………

…………………………

………………

………

戻ってきたわけだが、する事もない。

ということで修行だ。修行というより、スペックの確認だな。

この体になったということで、どの程度能力は上がったのか確認しなければならない。

まずは腕力。
俺は自分の身長―まぁ１３０?ぐらいだろう―ほどの岩を持ち上げてみることにした。
少し大きいと思うが、サイヤ人ならいけるはず！
俺は岩の下の方を持つと、思いっきり持ち上げてみる。

「ぐぅぎぎぎぎぎぃ！」

お、重い！　凄い重い！　つーか重い！
正直重いって思いすぎなんだろうが、普通に重いのでしょうがない。
そのまま力を入れ続け、少しぐらっと動いたところで岩から手を離した。

「はぁはぁはぁ……」

はぁはぁ言ってるが、別に変態さんではない。疲れてるだけだ。
正直言ってもうちょっと動くと思ってた。

まぁいいか。少し動いただけでもいい方だろう。
次は木でも殴ってみようかな。俺は息を整えた後、木の前に立つとそのまま正拳突きをした。

ドシン！　と木が揺れ、鳥が羽ばたく。……まぁまぁかな？
普通正拳突きではこんなに揺れんだろうし。これは毎日やろう。

さて次だがジャンプ力とかどうだろう。
俺はナイフ（仮）を持って木の横に立つ。
俺は足を曲げ、思いっきり力を溜めるとそのままジャンプした。
ぴょ―んと跳び、頂点で一瞬止まったところで、木にナイフ（仮）で印をつける。
とんっと地面に降り立ち、印の場所を確認してみた。
目で確認した感じ、４～５ｍぐらいだろうか。
人間としては驚異的だが、サイヤ人としてはどうなんだろうか。
悟空でも１０ｍぐらいは普通に飛びそうだから、まだまだかな。

つぎは視力。これは遠くを見てみよう。
ということで上下左右、色んなところを見てみた。
結果、およそだが４０～５０メートル先の鳥の目をハッキリ見ることが出来た。
一瞬どこの民族かと思った。あの人たち凄く視力いいしね。

とこんな感じで調べていったが結果、全体的に人間としては驚異的な能力だが、サイヤ人としてはまだまだってな感じだ。
まぁスペックに関しては地道に修行すればいいし、悟空もあんだけ強くなれたのでどんどん修行していこうと思う。

俺はその日、精神的にも身体的にも疲れていたので、そのまま寝ることにした。
明日からどうなるかわからんが、強くなれる事を願った。

続く

第2話　修行すっか！

――――――――――――――――――――side流

あれから約5ヶ月。
最初は苦しかった生活も、徐々に問題点が改善され快適とはいわないが、ある程度の生活ができるようになった。

まず洞窟を変えていった。
周りを探索している時、見つけた大量の藁をベット代わりにしたり、少しゴツゴツした壁や床を、岩など固い物で削って平らにしたり、獣がきたとき用のためのトラップを張ったりと色々な事をやってきた。

食生活についても変わってきている。
最初は魚中心だったが、それに飽きてきた俺は肉を求め、獣を罠に嵌める為に落とし穴を作ったりトラップを作ったりと、最初こそ上手くはいかなかったが徐々に上達していき、最近では肉料理が多くなってきた。
余った肉は、うろ覚えでの記憶をたどってやった燻製を試行錯誤でやっていき、なんとなく出来るようになってきた。

そしてあの日からやっていた修行は、なかなか大変だった。
修行するにしても何をすればわからないし、どういう風に鍛えればいいのかわからなかった。
ということで最初は筋トレやマラソンなど、基本的なことからやってみた。
少し亀仙流の修行をしてみようかと思ったけど、あれは基本があってからこそのものなので、もう少し鍛えてからやってみることにしてみた。

筋トレといってもこの身はサイヤ人。
スペックを利用しての、自分を追い詰めるような修行をしてみた。
例えば腕立てでは、背中に何十キロもありそうな岩を乗せてやってみたり、マラソンでは体に肉を巻きつけて、肉食獣に追いかけられるなど色々やってみた。
成長しているかはわからんが、下がっているということは無い。
最近では亀仙流の修行を取り入れて、背中に意外に近くにあった海で獲った亀の甲羅を、頑張って加工して甲羅を背負ってみたり、野菜食いてぇ……ということで素手で畑耕そうぜ！　みたいな感じで畑を作ってみたり、湖で鮫はいないが思いっきり泳いでみたりと、

少しやり過ぎた感はあったかもしれんが頑張ってきた。
畑仕事のせいで手は荒れ荒れだし、何回か蜂の巣をつついて避ける修行をやってみたが、最初はかなり刺されて顔が膨らんだ。

ここまでやってきたのだから、少し自分のスペックが気になった。
ということで少しスペックの再確認でもやってみようかなと思った。

まずは腕力。
俺は木の目の前に立つと、腕を腰に溜め、そのまま力強く正拳突き。

「どりゃあっ！」

ズドンッという音とともに、木は殴ったところから折れていった。
折れたらいいなぁとは思っていたが、まさか本当に折れるとは思わなかった。
折れた木は洞窟で何か利用させてもらおう。家具とか床とか…。

さて次にジャンプ力だが早速やってみよう。
俺は木の横までやってくると、思いっきり垂直に跳んでみる。
ぴよーんというよりびゅん！　という感じでとんだ俺は約４０～５０ｍは跳んでいた。
どんだけやねんという感じで、改めてやっぱ人間やめてるなと思った。
ちなみに亀の甲羅は脱いでいる。流石に着けたままだと重くて跳びにくい。

最後に視力だが、これは比べるにしてもあまり変わってないと思うので、変えて岩を持ち上げてみることにした。
俺は前と同じ岩の前に来ると、下の方を持って持ち上げてみる。

「よいしょ」

随分軽く持ち上げてるなと思ってるかもしれんが、実際凄く軽く感じた。
もうちょっと苦戦するかと思ったけど、意外に普通に持ち上げれた。

なのでレベルアップして、２０～３０ｍほどの大岩を持ち上げるのではなく、動かしてみようと思った。
皆もわかっていると思うが、悟空とクリリンがやっていた大岩動

かしだ。修行の最後にやってたやつ。
俺は洞窟の近くにある大岩のところまで来ると、岩に手を付け、思いっきり動かしてみた。

「ぐっ！！　ぐぎぎぎぎ……！！！！」

う、うごかね――！　重すぎるぞ、この大岩。
よくこんな大岩動かしたな、あいつら……。

ともかくこれが動かせるぐらい鍛えないとな。
そういえばサイヤ人って、シッポって弱点だよな。
これも鍛えないとやっぱ不味いか……。
というか本当に弱点なのか？　よし、一回握ってみよう。

「ふにゃん……」

こ、これはやべぇ…！　すげぇ力抜ける。
最初に鍛えた方がいいかもな、シッポ。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

さて、スペックも確認したところで、修行でもしようか。
修行内容としては、筋トレとかも大事だが新たにやりたいことがある。
まずは“気”の認識と、それの活用方法だ。
ドラゴンボールの世界では、“気”のような不思議パワーがあり、それはそれは戦闘に大分役立っていたように思える。
もしそれを自由自在に操れるようになれば、かなりの戦力アップを図れるのではないかと思ったわけである。

ということでやってみたいのだが、やはりここは座禅ではないだろうか。
ほら、悟飯だってビーデルに教えた時、座禅的なことしてたし、ここは座禅でいくべきだろう。
それでは座禅をやってみようではないか。

「……」

１０分経過

「……」

３０分経過

「……」

６０分経過

「……ぐぅ」

……はっ！　ね、ねねね寝てないぞっ！
ほ、ホントだからな！　くっ！　なんだその「なに言ってんの、コイツ？」みたいな目は！
バカにしやがって、くそ！　いじけてやるっ！

――――閑話休題――――

……すこし取り乱してしまったようだね、みんな。
ハハハ、ボクガソンナニアワテルワケナイジャナイカ……。

まぁいい…。とりあえず座禅はこのまま続けていく事にして、ちょっと修行してくるわ。
体がなまっても困るから、毎日続けないとね、じゃあ。

～流修行中～

さて、今日の修行も終わり、いまは修行ついでに狩ってきた肉を

焼いて食っている。
血抜きもやっているので、不味くはないがやはり塩が欲しい。
どうしたものか……やはり、どこか旅に出て塩のあるところまで行ってみるか。
とりあえず修行だな。強くならないと、獣に襲われた時とか困るし。
盗賊とかがいるとか、そこはわからないけど、ここが地球じゃないことぐらいはわかる。
だってなんか魚とか獣とか見たこと無い奴ばっかだし。この前とかでっかいトカゲみたいなのが空飛んでたし、まぁトカゲというかドラゴンだと思うけど…。
あれはビビッたね。あんなんいるとか普通想像しねぇよ……。

空を飛ぶで思い出したけど、舞空術めっちゃ覚えてぇ……！
だって空飛べんだぜ？　最高じゃん！　人間の夢でしょ、空を飛ぶとか。
いつか覚えてやる。あとかめはめ波や気円斬とか操気弾も覚えたい。

まぁ頑張って修行しますか！
俺は心の中でそう思いながらも、藁に囲まれ眠りについた。

続く

第3話　旅立ち、そして――…

――――――――――――――――――――――――――――side流

「だらっしゃあぁ！」

気合の声とともに、ビルのような大岩が動き出す。

あの時よりも鍛えぬかれた俺の体は、こんな大岩を動かせるようになるまでになった。

時は流れて１年半、現在俺の身長は１４０ｃｍほどになり、筋肉が引き締まった体となっている。
力量としては、初めての天下一武道会の時の悟空より少し上、といったぐらいか。
まぁ相性とかあるし、実際戦わないと結果なんてわかんねぇしな……。

「ふぅ……戻るか」

とりあえず今日は修行も全部終わってるし帰ることにする。

……

……

……

……

……

……

……

洞窟に帰ってきた俺は、夕食を食うと湖畔にある草原に寝転がる。

「ゲプッ……あぁ～、腹いっぱいだ…」

最近、食料の需要に供給が追いつかなくなってきた。
やはりサイヤ人は燃費が悪いって事だろう。
いままでこの辺りの動物などがいなくならないように気を付けてきたんだが、年をとるごとに一度の摂取量が半端なくなり、少しこの辺りに生息する動物が減ってきた。

このままではこの森の動物がいなくなってしまう。
なので旅に出ようかと、最近考え始めた。
正直ここをでても生活できるかわからないし、お金を稼げるかもわからない。
しかしこのままっていうのもダメなので、やはり旅に出るべきだろう。

もしこの世界――っても予想でしかないんだが――がファンタジー的な世界なら、ギルドなり傭兵なり、俺ができることなら幾らでもあるだろう。
どうせなら国に仕えて騎士ってのもいいかもな――…ま、剣使えないんですけどね。

まぁその辺はこの森を出て、外の世界を見てからにすることにしよう。
しかし何時でようか……1ヵ月…1週間……いや、明日ぐらいに出るか。
べつに荷物も多くないし、迷うといつまでも出ないような気がするからな…。

「よし！　とりあえず寝るか！」

俺は起き上がり、湖畔から寝床へと移動すると、藁の上に寝転がった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

―――――――――ちゅん、ちゅん、ちゅnキュールルルル…

…………ちゅん。

朝になり、爽やかな日差しとともに小鳥たちの鳴き声が聞こえて

くる。
しかし俺の腹の音によって遮った所為か、小鳥たちがこちらを白い目で見てくる。
なんて人間味のある小鳥達だろうか。よし、ムカツクので焼いてやろう。

俺が小鳥達の方に向かうとすると、小鳥たちはこちらにむかって糞を落としてきた。
かなりの数が降り注いできて、全て避けきろうとしたが一つ避けきれず、俺の頭に糞があたった。

――――――アホ～、アホ～、アホ～……

やかましいっ！　アホ言うなっ！

――――――ボケ～、クソ～、ナス～

うぜぇ！　つーか、なんでそんな喋ってんだよ。
テメェ、なんて鳥だこの野郎、焼き殺すぞゴォラァァ！
俺がそういうと鳥たちはどこかに羽ばたいていった。

まったく失礼な鳥達だ。
俺は頭に付いた糞を湖でバシャバシャ洗い流すと、早速朝食を作る。
といっても肉焼いて、魚焼いて、それで食うだけだ。
まぁ野菜もあるが、あんまり腹の足しにはならない。

俺はパッパと朝飯を済ませると、旅の準備を始める。
昨日は暗かったからあんまり準備をしなかった。
俺は黒曜石ナイフ、今まで取ってあった獣の皮、牙、食料を持つと洞窟から出る。
さすがに皮とか牙は随分と多いが、別に重いということはない。
ただかさばる。
それらは蔦で縛ったり、葉っぱに包んだりと運びやすくした。
食料もけっこう多いが、サイヤ人の俺としてはもっと欲しいところだ。
まぁ食料は旅をしながら狩りをすればいいので、別段困ることも

ないだろう。

「よし、行くか…」

たぶんこの洞窟に帰ってくる事もないと思う。
1年ちょっとしかいなかったが、住めば愛着も湧くし、別れも惜しくなる。
だが俺はポジティブなので、いつか忘れるだろう。ただの洞窟だしね。

「ということで出発進行――っ！」

俺はこの樹海のような森を抜けるため、森にある川沿いを沿って歩き出した。

……

……
……
……
……
……
……
……
……

旅を続けて1週間。
俺は何キロか先に、大きな街があるのが見えた。
俺の周りは丈の低い草原ばかりで、周りを見渡せやすく、街の発見も早かった。

この一週間の間、幾つかの村、町ぐらい見つけれると思っていたのだが、森が予想以上に人里から離れていた所為か、一つも見つけることが出来なかった。
そして今日、やっとの思いで見つけたのが、先ほど見つけたという街である。
ここから見た感じ、街は大きいほうだと思うので、流通がある賑やかな街なんだろう。
つーか早く料理を食べたい、ベッドで寝たい、俺以外の人見たい。
人というか、正直ファンタジーなのだとしたら、人がいるのかも怪しい。

まぁそんな事はどうでもいい。
俺はちゃんとした料理を食べるため、遠くに見える街目指して走り出した。

そして街中。
さきほど入り口で軽く持ち物検査をされ、問題なしと判断された俺は、街中を歩いていた。
周りには狼男や妖精、猫耳美女など人以外の生き物がたくさんいた。
傭兵みたいな格好をした奴や、騎士みたいな奴がいることから、やはりここはファンタジーな世界なのだろう。
厨二な俺としては、むしろカモンな状況なので、正直、最高な気分ってな感じだ。

俺の周りでは果物や肉などを売るおばちゃんがいたり、酒を煽る荒くれ者がいたりと、大分騒がしい。
遠くのほうには、形は違うがコロッセオみたいな闘技場らしきものがある。
街の入り口にいる守衛が、闘技場での賭けがこの街の特徴とかなんとか言ってたから、多分アレが闘技場に違いない。

そういえばこの街の名前って何なんだろうか？
守衛のおっちゃんに聞いとけばよかった…。

俺はそう思いながらも、背中に背負っている荷物を売りに行くことにした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

毛皮などを売って、懐が十分に潤った俺は、宿屋を探すことにした。
とりあえずこの街を拠点に、生活を整えていこうと思ったからだ。
この年齢でも、この西洋並みの時代なら、働いていても余り珍しくはないだろう。
格闘などをするなら傭兵とかもいいかもしれない。
それに戦う技術を上げるなら、闘技場で戦うのもいいかもしれない。
闘技場で勝っていけば、金も貰えて傭兵としての名前も売れるかもしれないしな。

その後、宿屋を探して、何年ぶりかのちゃんとした料理を食べ感動した後、適当に体を拭くと、少し固いベットに入って眠りについた。

そして次の日。
俺は朝食を食べた後、昨日から気になっていた闘技場に来ていた。
闘技場にはもの凄い数の観客がいて、まるで人がゴミのようだっ！　と言いたくなるほどだった。
今日はとりあえす視察というか見るだけにして、いけそうだったら明日から出てみようかと思う。

俺は空いている観客席を探し出すと、戦いが始まるまで待つことにした。
それから数分後、俺が空を見て暇を潰していると、アナウンサーの大きな声が響き渡った。

『さぁ、今期も開催されました、グラニクス夏季大会ミネルウァ杯！　第一試合西方は地元一の拳闘士団「グラニキス・フォルテース」の中堅自由拳闘士バリス・ファラウン！！！』

へぇ～…拳闘士団とかあるのか……まぁ所謂ギルドみたいなものか。
俺も強くなったら作ってみようかな、拳闘士団。

『対する東方はここ最近頭角を現し始めた、奴隷拳闘士――――…』

そこでアナウンサーはそこで一息溜めると、大声で叫んだ。

『――…ジャァァァック・ラカァァァァァァンッ！！！』

……。

……。

……な、なんだって――――ッ！！！

続く

第４話　拳闘士

――――――――――――――side流

『――…ジャアアアック・ラカアアアアアンッ！！！』

……な、なにいいいいいッ！！

な、なんでこんな所にジャック・ラカンがいるんだ！？
ありえん……もしかしたらサイヤ人っぽいし、ドラゴンボールの世界かなぁ…とかは思ってたけど、流石にネギまの世界とは思ってなかった。
といってもこの街を見た瞬間、あっ、ドラゴンボールの世界ではねぇな、と少し落ち込んだけど、まさかこんな結末が待っているとは……。

いや、しかし名前が一緒なだけの他人なのかもしれん。
とりあえず出てきた『ジャック・ラカン』とやらを詳しく見てみよう。

……。

……。

……ふぅ。

――――――…はい、本物ォォォォォッ！！！

俺はネギまの本を持っていたので、原作は知っている。
そりゃあ流石にこんなに時間が経てば、細かいところは忘れてるし、抜けているところもあるかもしれん。
しかし、しかしだ。さすがにジャック・ラカンの姿ぐらいは覚えている。
見た感じまだ子供だが、褐色の肌に長めの金髪、特徴的な髪型を

見れば、なんとなく面影を感じる。
けっこう鍛えているようなので、マッチョなのもジャック・ラカンっぽさを感じさせる。

しかし、まだまだ成長途中なのだろう。
一つ一つの動きに荒々しさがあるし、動きに無駄がありすぎる。
といっても強さ的には、俺と同じくらいかどちらかが少し強いぐらいだろう。
まぁ考察は後でもできる。とりあえずこの試合を見届けることにしよう。

……。

……あっ！

……そこは、それじゃないだろ！

……うぉ！

……あっ…吹っ飛ばされた……。

ということでラカンは最後に相手を吹っ飛ばして見事勝利。
しかし勝ちはしたが、ラカンも死にかけるほどの重傷。
即座に闘技場の治癒術士のもとに運ばれていった。

「ふ～ん……」

にしてもなかなか面白そうだ。
これはいってみるか……。

俺は観客席から立ち上がると、その場を離れた。

……

……

……

……

……

……

……

そして次の日。
俺は闘技場の参加者控え室にいた。
昨日見た感じ面白そうだったからな、戦うのも。
まぁ人型あいてに戦ったことないから、勝てるかわかんないけど。
だって今までずっと獣相手だったし。熊とか狼とか。
まぁ正確には熊みたいな奴や狼みたいな奴だったんだけどね。
ここが異世界の所為かわかんないけど、地球にいるような生物ではなかったし。

「自由拳闘士のナガレ・オウミさ～ん。直ぐに西方、入り口にきてくださ～い！」

おっと、そろそろ出番のようだ。

ちなみに名前はこちら風に登録した。名前が先で、苗字があとになってる。
まっ、とりあえず行ってくるわ。

俺は控え室から出ると、闘技場西方入り口へと急いだ。

『さぁ今日もやってきました、グラニクス夏季大会ミネルウァ杯！　二日目の第一試合西方は今日が初めての闘技場入りという新米自由拳闘士ナガレ・オウミ！』

俺はそのアナウンサーの声とともに、西方入り口より闘技場中心部に向かっていく。

『対する東方は地元一の拳闘士団「グラニキス・フォルテース」の中堅自由拳闘士ミハイル・キリシトン！』

――――――…ウオオォォォォォォォォォォオオ！！！！

相手も響き渡る観客の声とともに、こちらへと向かって来る。
見た感じムキムキマッチョのお兄さんという感じのなりで、なかなか強そうだ。

「よぉボウズ……ここは遊び場じゃねーんだぜ？」

まったくもってテンプレな言葉である。

「おっさん、見た目で判断すると、痛い目見るぜ？」

「あぁ？　なんだと？　つーか俺はまだ２５だ」

俺は挑発するように言った。
おっさんは俺の言葉に少し苛立つ。

「まぁ負けていいなら、そのままでいいよ？　どうせ俺が勝つし」

「ほざけ、クソ餓鬼ぃ！」

『ルールは皆様ご存知のとおり！！　ギブアップ戦闘不能で決着！！　武器・魔法に使用制限なし！！』

俺と相手はその声とともに、互いに後ろに下がり構える。

『――…開始！！』

――――ガァン！！

開始の合図とともに、俺と相手の拳がぶつかり合う。
俺はそのまま離れず、拳のラッシュを加えていく。
敵も俺の拳に拳を当てて、こちらの攻撃を相殺していく。
数十発にも及ぶ攻撃を繰り返すと、互いに一度離れた。

「やるじゃねぇか、ボウズ……威勢のよさどおり、実力も伴っているらしいな」

「おっさんもな」

どうやら俺の実力はおっさんの目に適ったらしい。

「行くぜッ！！」

「こいや、おっさん！！」

声とともに互いに、隙を見せず攻撃を加えていく。
実力五分五分。隙を見せた方が負けることになる。

「ふんッ！！」

「はぁ！！」

――――――ズン、ズズン、バガァン、ズドォン！！

互いに致命傷は与えれないが、体中に生傷が増えていく。
研ぎ澄まされた拳は時に、その辺のなまくら剣より鋭利になる。
時間が過ぎるほど、生傷が増えていくことに焦るが、ここは冷静に対処しなければいけない。

ここは一度下がるべき。
そう考えた俺は気功波を相手の顔へと放った。
まだまだ威力は弱いが、大きめの岩を砕くほどの威力ぐらいはある。

「うぉお！？」

当たりはしなかったが、相手に隙が出来た。
俺はその間に後ろへ下がると、注意しながらも構えを解いた。

「ふぅ……まさか“気”をいきなり放つとは……俺も流石に驚いた」

「それぐらいで驚いてたら、次のは危ないかもな」

「ほぉ……それじゃあそのナニかを見せてもらおうか！！」

相手はそういうと目にも止まらぬスピードでこちらへと突っ込んでくる。
あと数歩と言うところで、俺は両手を開いて額の前へと構える。

「――――…“太陽拳”！！」

――――パァァァァ！！

技の発動とともに、辺りは光に包まれ、俺の姿を直視した相手は一時目が見えなくなる。

「目がぁ、目がぁぁぁぁッ！！！」

まさかあの名言をここで聞けるとは……貴方の本名、ム〇カでは？
冗談はさておき、俺は瞬時に近づくと相手の腹に右ストレートを叩き込む。

「ぐふぅ！」

吹っ飛んだ相手は闘技場にある結界の壁へと叩きつけられる。
しかし俺の手は休まない。そのまま近づくと相手の体に拳のラッシュを叩き込んでいく。

「ぶふぅ！？　ばぎゃ！？　じゅぎゃ！？　ぴぎょ！？」

拳が当たるたびに奇声が上がるが、ここで手を休めると勝つことが出来ない。

俺は一旦下がると、俺のとっておきを発動させる。

「これで終わりだ！！　……か～、め～、は～、め～――――…」

相手は慌ててその場から離脱しようとするが、体中を殴打され上手く動かすことが出来ない。
その間に俺の構えた両手には、体中の気が集まってパチパチと発光している。

「――――…波ぁ――――――――――――――っ！！！！！！」

両手を突き出し、集めた気が解き放たれる。
その気は一瞬で相手の体にぶち当たって、そのまま相手を壁に叩きつけた。

「……かはッ…！？」

相手はそのまま崩れ落ちると、闘技場の地面へと倒れこんだ。

『決まったぁぁぁぁぁ！！！　まさかの番狂わせ！！　勝者ナガレ・オウミ――――ッ！！！！』

――――……ウォォォォォォッ！！！！！

アナウンサーの勝利宣言とともに、闘技場の観客席の爆発のような歓声が上がった。
俺はすこしその歓声にビビッたが、顔がニヤけるのは抑えきれなかった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

試合後、いくつかの拳闘士団の勧誘があったが、全て断らせてもらった。
いつか旅に出るし、そこまで拳闘士団に魅力を感じなかった。
拳闘士団の人たちはすこし残念がっていたが、また入ることになったら言ってくれといって、去っていった。……まぁそう言われても、入る事はないだろう。

いまはお腹を一杯にするため闘技場にあるカフェで、大量の料理を食べていた。
すでにテーブルには、いくつかのお皿の山がある。
やはり勝負後はお腹が減ってしまう。もっとお金を溜めないと、食費がなくなる。
俺が料理を食べていると、向かい側に誰かが座った。
ふと料理から視線を移すと、そこには褐色金髪少年が……。

「ぶっ！！」

「うおッ！？　汚ねぇ！！」

ごほごほと咳き込みながらも、相手を見てみる。
昨日の試合のせいか、体のあらゆる所に包帯を巻いている。
といっても治癒術士のおかげか、たいした傷でもないようだ。

「いきなり噴出すとは、失礼なやつだな」

「うっせぇ……」

そりゃあいきなり原作メンバーが目の前にくりゃあ、驚くだろうよ。

「……で、何の用だ？」

「いや、特に用事はねぇ」

「ねぇのかよっ！！」

おっと、思わず突っ込んじまった…。

「別に用事がないと会っちゃいけねぇことなんてねぇだろ？」

「少しぐらいはなんか思惑があるだろ…」

「まぁ、なんだ、ただ気になっただけさ。中堅に勝った新米のことがなぁ」

「ただ運がよかっただけだ。つぎ戦えば負けるかも知れんな」

「謙遜するなよ。運も実力のうちって言うしな！」

まぁそうとも言うが、太陽拳なんかつぎ戦えば、なにかしら対策がたてられるだろうな。

「まぁいい。このまま闘技場で戦えばいつか俺と当たるだろう。その時は俺が勝たせてもらう」

「そうだな、いつか当たるかもしれんが、負けるつもりはない」

こいつとやって勝てるかわからんが、やってみるのは面白そうだ。

「そういえばお前ナガレって言うんだよな？」

「ああ、そうだが。それがどうかしたか？」

「名前で呼んでいいか？　俺もジャックかラカンで呼んでくれ」

「いいぞ。俺もラカンと呼ばせてもらう」

俺とラカンは右手を出して、握手した……全力で。

「よ、よろしくなぁ、ナガレ……！」

「お、おう、よろしくラカン……！」

うおぉぉぉぉぉ負けねェ！！！　とか叫びながら握手をしつづけた俺たちが、カフェのおばちゃんに殴られたのは、言うまでもない。

あの野郎……つぎ会ったらぶっ飛ばすッ！！

続く

第5話　そうだ、ヘラスに行こう！

――――――――――――――――――――――――――――side流

ラカンと戦ったり、他の拳闘士たちと戦いながら過ごして、はや6年。
体はすでに13、14歳ぐらいには成長していると思われる。

ここ2年は闘技場で戦い続け、最近では拳闘士の中でも上位に入るほどの腕前になってきた。
強さ的には、ラディッツ対戦時の悟空より少し弱いぐらいだと思う。まぁ予想なんだけど…。
4年ぐらい前からは、舞空術や気円斬など覚えるため鍛錬を続けてきた。

結果、舞空術はかなり出来るようになった。どうやら俺は気のコントロールが得意らしい。
気円斬のほうも、気のコントロールが出来ていれば使える技なので、舞空術よりかは時間はかかったが、なかなかいい感じに出来ている。

界王拳や元気玉も少しずつ練習しているが、やはり体得が難しく、なかなか使用することが出来ない。
界王拳は発動する兆しがないし、元気玉はまだまだ気の集まりが悪い。
やり方は間違ってないと思うんだが、やはりそれほど難しい技ということなんだろう。

他にもいろいろ覚えている技もあるが、その辺はまだまだ威力も弱いし、扱いきれてないから、後々使う機会があれば紹介していこうと思う。

――――閑話休題――――

まぁ話を戻すことにしよう。

今日は闘技場での戦いも休みだったので、宿屋で暇を持て余していた。

まぁ最近戦いが続いていたので、今日は宿屋で寝とこうかなぁと思ってたやさき、俺の部屋の扉をコンコンとノックする音が聞こえた。

はい、と返事をしながらも扉を開けてみると、そこにはマッチョな金髪野郎がいやがった。

「よお！　ナガｒ――…」

ガチャ

俺は扉を閉めると、椅子に座って読書をすることにした。

ふぅ……にしても今日は暇だなぁ……。

ちなみにこの本の題名は『猿でもわかる格闘技』

税込み１２５０ドラクマで、全国の書店にて絶賛発売中である。

「――って何閉めてんだよッ！」

バァン！　と扉を破壊してしまいそうなほどの勢いで開けて入っ

てきたのは、ラカン（バカ）だった。

「それで、何の用だ？」

「スルーかよ……まぁいい。要件は一つ、俺は旅に出る、以上」

「ふ～ん、達者でな」

「あれ、めっちゃ軽い…」

「お前の扱いはそんなもんだ」

つーか、いつか旅に出るとか前に言ってたし。
ちなみにラカンはすでに奴隷拳闘士から普通の拳闘士になっている。
奴隷から一般市民になったということだ。
原作ではもっと時間がかかってた気がするが、どうでもいいので気にしない。

「まぁいい。俺は行くが、お前はどうすんだ？」

「……そうだな。お前が旅に出るなら、俺もそろそろ旅を再開し

ようかな」

「そうか、じゃあどこかで会うかもな」

「そうかもな。まぁ死なない程度にがんばれや」

「ハッ！　俺が死ぬと思うか？」

「世界が消滅したとしても、死なねぇと思うな」

「くくく、ちげぇねぇ」

まだまだラカンは原作と比べれば弱いけど、それでもその辺の奴らに負けるとは思わん。
俺との勝負はほとんど実力が拮抗してるから、引き分けばっかりだけど。

「いつでるんだ？」

「明日、明後日のあいだにはこの街を出る予定だ」

「そうか。俺も早めに出るとしよう」

その後、話すこと話したラカンは部屋を出て、部屋には俺一人が残った。

まぁ元々俺とラカンしかいなかったので、ラカンがいなくなれば一人になるのは当然だが。

そんな事はどうでもいいとして、旅に出るなら準備をしないとな。

俺はお金を持つと、食料や日用品、その他の物を買いに部屋を出た。

……

……

……

……

……

……

……

「おっちゃん、それとそれ、それからそこのやつもくれ」

「おっしゃ、全部で２４００ドラクマだよっ！！」

「はい、２４００ドラクマ」

「毎度！」

いや、毎度っていうほど、この店来たことないんだけど……。

俺は獣人族のおっさんにお金を渡して商品を貰うと、その場を離れ、荷物片手に歩き出した。

さっきので買う物は全部買った。調味料や簡易式のテント、その他にも旅に必要な物を買った。
最初、食料を買っとこうと思ったが、旅の途中でなんか狩っていけばいいかなと思って、買うのは止めた。
というか超大食漢である俺が食料を買うと、物凄い量の荷物になってしまうので買う気がうせた。

とりあえず荷物を宿屋に置きにいくか。
俺は現在、邪魔な荷物を置きにいくため、宿屋に向けて歩を進めている。
あともう直ぐで宿屋につくと言うところで、裏路地の方から女の子の声が聞こえた。
壁沿いに移動して、物陰から確認してみると、ローブを纏った女の子と男が二人いた。

「なんじゃおぬしらは！」

「おいおい、なんでヘラス族のお姫さまがいるんだ？」

「なんでもいいじゃろ！　はなさぬか！」

「ぐへへへ、ロリロリな女の子じゃないかぁ～！」

「ヒィ！？　こ、こやつ、気持ち悪いのじゃぁ……！」

「いいよぉ～！　もっと罵ってくれぇぇぇぇぇぇ！！」

……やべぇ、マジやべぇ。
テオドラっぽいのがいるのもヤバイけど、最後の男とかマジやべぇ……！！！
うわぁ、俺ここ出たくねぇ～…あいつらと関わるのも嫌なんですけど～……。

「さあさあさあ！　ぼくちんとイイコトしようじゃないかぁぁぁぁぁ！！！」

「ぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁああ！！！！」

テオドラ、マジ絶叫。
涙目で逃げてるのは凄い萌えるんだけど、そろそろ行かないとテオドラの処女がなくなる。
俺は物陰から出て、テオドラと男の間に割り込むと、拳をそいつの顔に叩き込む。

「たわらばッ！？」

あっ、そんな悲鳴でるんだ……初めて聞いたよ。
俺の拳によって顔面強打された男は、そのまま後ろに吹っ飛んでいくと建物の壁にぶち当たった。
そのまま動き出す様子も見られないので、たぶん気絶したんだろう。死んだわけではないのであしからず。

「誰だテメェ！！」

「そんなもん、なんでもいいだろ？　問題はお前達が何をしてるかだ」

「あぁ？　…って、お前は拳闘士のナガレ・オウミじゃねぇかッ！？」

俺の名前、知ってるじゃねぇか……顔、確認してから尋ねろや。

「それで？　逃げんのか、それともここで俺に潰されるか……二つに一つだ」

「舐めてんのか、テメェ！」

「１０秒の間に答えろ。１０―…９―…」

「な、なに！？　じゃあ、にg――…」

「――…8、7、6、5、4、3、2、1、0ッ！！　はい、時間切れ――！！」

「おえぇ！？　せこすg――…」

「ちなみに反論は聞かないので、あしからず。それじゃ――――…刑の執行だ」

「ギャ――――――――――――ッ！！！！」

俺は宣言とともに、変態どもをこれから瀕死程度にするため、刑の執行を始めた。

ちなみに完全な余談だが、次の日、街にある裏路地にて二人の男性が裸で転がっていたらしい。

体中に殴打された痕があり、男達は顔を苦悩の表情にかたどられていて、随分うなされていたらしい。

＝＝

「大丈夫か？　嬢ちゃん」

俺は男ども（変態）をボコッたあと、テオドラらしき女の子に話しかけた。

「うむ、わらわは大丈夫じゃが……そやつらは大丈夫なのか？」

「ああ、心配するほどでもないぞ」

「そ、そうかの？　ならいいんじゃ」

どうやら予想以上にボコられていたので、心配になったらしい。

べつにそこまで心配するほど殴ってはいない。たぶん明日ぐらい

に見つかるから、誰かが病院に連れて行ってくれるだろ。その後のことは知ったこっちゃない。

「そういえば嬢ちゃんは、姫さまだってな。ヘラス族と言うと、たしかヘラス帝国か」

「そうじゃが、それがどうかしたかの？」

テオドラはきょとんとした顔で、頭をコテッと傾ける。
おふ……まさかの精神攻撃、流は５０００の萌えダメージを喰らった。

「いや、たいした事じゃないが、一国の姫さまがなんでこんなトコにいるんだ？」

「暇だったからのぉ。抜け出してきたんじゃ！」

バカだ……ここにバカがいるぞ。
暇だったからって、こんなトコに一人で来たらダメだろ。

「……まぁいいや。それで嬢ちゃんの名前は？」

「テオドラじゃ！」

「元気でけっこ―。俺はナガレ・オウミ、好きに呼んでくれ」

「じゃあ、おぬしのことをナガレと呼ぼう。決定じゃ！」

そんなこと大声で言われても、俺は反応しにくいぞ。

「それでテオドラ嬢、これからどうするんだ？」

「テオじゃ」

「……は？　なにが？」

「…ナ、ナガレには、テオと呼んで欲しいんじゃ／／／／」

テオドラは頬を赤く染め、モジモジしながら上目遣いでお願いしてきた。

……ぐはぁ！　流に精神的攻撃。急所に当たった、流に２０００の萌えダメ―ジ。

まさかテオドラがこんなコンボ攻撃を加えてくるとは……テオドラ……恐ろしい子！！！！

と、冗談もさておき、さっそく話の続きとしようじゃないか。

「……テオ、これでいいか？」

「うむっ！　それでよいのじゃ！」

「話を戻そう。それでどうするんだ？　テオ一人で帰れるとは思えんのだが」

「それなら心配ご無用じゃ！　帰るとき用のために、兵を呼び出す魔法道具を持ってきとる」

「……それなら大丈夫か」

「大丈夫なのじゃ！」

「じゃあ俺は帰る」

俺がそう言って宿屋に帰ろうとすると、テオが俺の体にくっ付いてきた。

「いやじゃ、いやじゃ！　ナガレにもヘラス帝国に来てほしいのじゃ！」

「なんでだよ……」

「城に戻っても、暇なだけじゃ。もっとナガレと遊びたいのじゃ！」

う～ん……べつにヘラスに行ってもいいけど、どうしようかな……。

まぁテオの近くにいたら、戦争とかにも介入しやすいしな。

たぶん途中でどっかに旅に出ると思うけど、その時はその時で考えよう。

「……よし、別にいいぞ」

「やった―、なのじゃ！」

その後、早速ヘラスに向かうことになったんだが、宿に荷物を置きっぱなしだったので、とりあえず荷物をとりに行った。

俺が荷物を取りに行っている間に、テオは帝国の兵を呼び出して、そこに帰ってきた俺と兵の間で一悶着あったが、テオの証言により

その場は収まった。
テオを助けたことにより褒美があるらしいが、最初は金を貰う感じだったので、それを変えて二年間の食事を保証してもらうことにした。
まぁ俺の食事量を知らないからそれでいけたが、食事量を知っていたら断わられたかもしれん。

その後、俺は二年間の間へラス帝国を拠点に、活動を続けることになる。

続く

第６話　修行、しようぜッ！

―――――――――――――――――――――side流

さて、前回の続きといこうか。

前回、街にてテオを助けた俺。
その後、テオに着いてきてほしいということで、ヘラスにやってきた俺は、二年ほどヘラスにてお世話になった。
今回はその二年間のことを話していきたいと思う。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

ということでヘラス帝国にやってきた俺、青海　流はヘラス帝国首都中心部にある城、その城内にある演習場にて、いつもどおり修行をやっていた。
ときは既に一年ほど経っており、最初は厳しい修行風景を見て驚いているヘラス帝国騎士の奴や、城に勤務しているメイドや文官などがいたが、それも一年ほど経てば大分落ち着きを見せていた。

体が大きくなってきてからやっている修行は、基礎的なトレーニングをはじめ、目を瞑っての格闘や空想敵を相手に動きを確認しながらの反復運動、ヘラス帝国に来てからは城にいる騎士に手伝ってもらい、騎士百人抜きをしたり、一人ずつ相手してもらったりと色んな修行をしている。

きょうは気を使った修行をしようと思う。まぁ技の練習というわけだ。
最近になって界王拳が形になってきたので、それを早く完成させたいってのもある。
界王拳は簡単に言えば、身体中の気を一気に爆発させて、身体能力を向上させているわけである。
しかし界王拳は身体に負担をかけすぎるので、あまり長時間の発動は出来ず、一時的なものでしかない。
できるなら界王神がいるような重力１０倍の場所があれば、もっと効率よく修行できるんだが……。
まぁないものねだりをしても意味がない。

――――閑話休題――――

「界ッ！　王ッ！　け――――――んッ！！！」

俺の気合の声とともに、身体中の筋肉は膨れ上がり、身体の周りには赤くなった気が轟々と吹き上がっている。
この技は気を大量に消費して発動するので、敵を倒すなら短時間で倒さなければならない。
ちなみに俺はまだ界王拳二倍ほどしかできない。それ以上すれば身体が壊れる。

「だりゃぁぁぁぁぁあッ！！」

――――バガァン

俺は界王拳を発動したまま、演習場の所々にある人型の的を、拳で叩き壊していく。

――――ダァン、ボギャン、ズドォン……ｅｔｃ．

「ぐっ……らすとぉぉぉぉぉぉ――――ッ！！！」

――――ボガァァァァンッ！！！！

俺は最後の的をこなごなにぶち壊すと、界王拳を解除し地面へ大の字に倒れこむ。

「はぁはぁはぁ……」

それにしても最後は危なかった。

身体中に引き裂かれそうな痛みが走ったし、界王拳が解除されそうだった。

「いつも思うが、めちゃくちゃな奴じゃのぉ……」

俺は息を整えながら声のほうを見てみると、そこには呆れたような顔をしたテオがいた。

「……ふぅ、見てたのかテオ」

「少し前からの」

俺は立ち上がると、テオの近くまで歩いていく。

「そうか……それで、何かようか？」

「いや、特にないぞ。近くを通りかかったのでな、気になっただけじゃ」

「そうなのか」

「そうなのじゃ」

話すこともないので、二人のあいだに沈黙が下りる。

「わらわはもう行く。帝王学やら、ようわからんもんを学ぶのでな」

「まぁ、そう言うな。学はもってたほうがいいと思うぞ。いつか役に立つ」

「そうは思えんのじゃがな。面倒なだけじゃ……」

「頑張ってこい」

俺はそういうとまた修行を再開する。

「……まったく、筋肉バカじゃのぉ」

テオが何か言った気がするが、小さくてよく聞こえなかった。

＝＝

「龍樹？」

時は流れて、あれから約一ヶ月。
自室にて身体を休めていたところ、テオが部屋にやってきてお茶の誘いがあった。
ＯＫした俺は、テオと一緒にテラスに出ると、菓子をパクつきながら話をしていた。

「ヘラス帝国の帝都守護聖獣の一体での。全長１００ｍを超える巨大な龍じゃ」

簡単に纏めるとこうだ。
龍樹は人間などよりも遥かに高い知能を持ち、遥か昔から生きる、「古龍」という霊格の高い龍で、古龍は吸血鬼の真祖などと共に最強種と謳われる存在らしい。神に準ずる存在なので、肉体を破壊されても滅びることはないという話らしい。

「龍樹の事はわかったが、それがどうしたんだ？」

「以前、強い奴と戦いたいといっておったじゃろ？　龍樹が丁度いいと思ってな」

「守護聖獣なんて戦ってもいいのか？」

「父上に聞いてみたが、『龍樹と？　おもしろいから可決！』という感じで許してもらったぞ？」

「軽いな、おい……」

王様ってそんなもんなのか？　いや、絶対違うだろう。
たぶんテオのバカっぽさは、その王様から引き継がれているな。
するとテオは頬を赤く染め、モジモジしながら喋りだす。

「そ、それでじゃな……ナガレでも龍樹はキツイと思うんじゃ」

「……まぁハッキリ言って、普通に負けるだろうな」

「だとすると、切り札はもっと欲しいじゃろ？」

「そうだな、ある方が有利になるし……」

「それでな、わらわに名案があるんじゃが……」

「なんなんだ？」

俺が聞くと、テオはさらに頬を染め、ぼそぼそと小さく呟く。

「ぱ…ぱ…ぱく……」

「ぱく？」

「パクティオーじゃ！」

「うおっ！？」

俯いてぼそぼそと喋っているかと思うと、いきなり顔を上げて大声で叫んだ。

いきなり叫ばれてはいくら俺でも驚き、心臓がバクバクいっている。

「わらわとパクティオーせぬか？　いやか？　嫌なんじゃな、そうなんじゃろ……」

なぜかテオはどんどんネガティブ思考へと陥っていく。
というか俺はまだ何も言ってないのに、なぜどんどん悪い方向にいってしまうのか、不思議でならない。

「テオ、落ち着け。俺はまだ何も言ってないぞ」

「え？　そうだったか？　……で、するのか？」

「だが断る」

「断るんかい！！」

おふぅ…ナイス突っ込み。

「冗談……で何時すんの？」

「今からじゃ！」

横を見てみると何故か仮契約の魔方陣が……何時の間に。
俺とテオは椅子から立ち上がると、魔方陣の中に立つ。
テオが魔方陣を発動すると、魔方陣が輝き、なにか変な気持ちになる。

「じゃあ、少し屈んでくれ／／／／」

「ああ」

俺とテオでは身長差があるので、俺が屈まないと口が届かない。

「い、いくぞ…／／／／」

いま思ったが、この風景を他人から見たら、俺……変態じゃん。

――――パアッ…――――…仮契約――――…！！

どうやら無事成功したようだ。まぁ失敗するほうがおかしいか。
目を開けると、二人のあいだに一枚のカードが浮かんでいた。

「テオ、コピーを」

「わかった」

テオはカードを手に持つと、カードをコピーする。
ちなみにわかっているとは思うが、俺が従者でテオが主だ。

「えっと名前は……」

アーティファクト：異界の英雄・七道具

名前はともかくカードの絵は、黄色い雲に乗った俺が、棒を握ってこちらを見ている。
周りにも色んな道具らしきものが浮いており、名前のとおり全部で七個あるようだ。

「来い《アデアット》」

俺の言葉とともに、周りに幾つかの道具が出現する。

まず目の前に黄色い雲――――――――――…はい、筋斗雲ですね、わかります。

そして飾りもなにもない赤い棒――――――――…はい、如意棒ッ！

扇子のような風を扇ぐものだろう物――――…たぶん、芭蕉扇だと思うよ？

小さな袋に入ったたくさんの豆――――――…仙豆だよ、どんどこど～ん！

四角い容器に入っている幾つかの何か――…ホイポイカプセルっぽいですけど、なにか？

微妙なデザインの玉がついた耳飾り――――…見た感じ、ポタラ。いつ使うんだ。

そして最後にやばそうな七つの玉――――――…おいおい、ドラゴンボール。何で来てんだよ。

正直言って全部やばいんだが、特に最後の奴はやばすぎる。
この世界のパワーバランスを崩しそうな品だ。これは即封印すべきだと思う。

「なんじゃ？　これは……よくわからんもんばかりじゃ」

そりゃそうだと思う。だって異世界のものだし。
とりあえずホイホイカプセルの中身を確認したいな。

「テオ、ここ以外で広い場所知らないか。人気が少ないところで」

「ふむ、そうじゃの――城の裏にある岩山とかどうじゃ？　あそこなら大丈夫じゃろ」

「よし、行こう」

俺は着いてきそうなテオを近衛騎士に預けると、舞空術で城の裏へと飛んでいった。

………………………………………………………

……………………………………………

………………………………………

………………………………

………………………

………………

………

容器の中にはカプセルが全部で十個あり、空が六個、入っていたのは四個。

一つ目の中身は人工重力装置の付いた半球型の建物で、千倍ぐらいまで重力があるようだ。

二つ目は鞄が入っており、中にはドラゴンレーダー、ミクロバンド、ＰＰキャンディー、変身スーツ＆バンドが入っていた。正直最後のはいらない。あとわからない人はｗｉｋｉで調べてくれ。

そして三つ目、何故か冷凍カプセル。これは死体を腐らせないようにするための物だ。

俺にどうしろと言うんだろうか。こんなの持っていても、どうしようもない。まぁいつか役に立つかも知れないので、一応持っておくことにする。

最後に四つ目、タイムマシン。俺を何処に連れて行く気なのか……。

どうせならいつか、超に会いに行こう←自暴自棄

正直最初以外のものはいらない。

最後なんか俺にどうしろというのか。

とりあえず先ほど一度入った人工重力装置付きの建物に入ってみた。

＝＝＝

とりあえず俺は頑張って立ち上がると、部屋を歩き回ってみる。

――――…ズシン、ズシン、ズシン

一歩一歩が怪獣みたいな足音である。
重いって言うけど、慣れてくると少し走れるようになってきた。
といっても殆ど早歩きみたいなもんだ。

「ファイト～～ッ！！　いっぽ～～～つッ！！！」

まるで某リボビタンなＣＭの言葉みたいだ。
ただ俺のやる気は漲（みなぎ）ったので、結果としてよしとする。
しばらくの修行はこれでいこうかな？　やっぱこういう環境のほうが鍛えれると思うし。

俺はその後三時間ほど修行をすると、一度ボタンをきって城に帰ることにした。

……

……

……

……

……

……

……

「はぁ？　半年、修行に漬け込むじゃと！」

「ああ、ちょっと龍樹に挑むには無理があるからな。修行だ」

あの重力を身体に馴染ませるには、短期間の修行では効率が悪い。なので半年、というか『別荘』を借りるつもりなので、外の一時間が中での二四時間とすると、半年＝約３０×６＝１８０日、１８０×２４＝４３２０時間、この４３２０は一時間＝一日とすると４３２０日となるので、半年の時間で約１２年間の修行が出来ることになる。

「じゃあ『別荘』借りるから」

「あっ！　ちょっとまて筋肉バカッ！」

俺はテオの声を無視すると、『別荘』へと向かう。
え？　年とるんじゃね―かって？　そこは秘策がある。

＝＝＝

ここは別荘内、無人島の浜辺に俺はいた。
ちなみにこの別荘はネギがラカンを倒すために修行場としてテオに貰ったやつと一緒である。

「出でよ神龍（シェンロン）！！」

――――ズズ――ンッ！！！　ズババァ――――ンッ！！！

俺の一言で七つの玉が光り出し、空は暗くなる。
雲がないはずなのに、雷があたりに降り注ぐ。
玉から一筋の光が上空に伸び、そこに目をむければ巨大なアジア圏に伝承されるような龍がいた。

『さぁ願いをいえ。どんな願いもひとつだけかなえてやろう……』

「では……俺の身体が最盛期になったとき、この身体を不老としてくれ。可能か？」

『可能だ…少し待て……よし、願いはかなえてやった。では、さらばだ』

神龍はそういうと姿をけし、ドラゴンボールがどこかに飛んでいこうとする。
ちなみにここは閉鎖空間なので、ドラゴンボールがどこかに飛んでいく心配はない。
また一年後に、この狭い別荘内を探せばいいので、随分と楽なものになりそうである。

「……にしても不老になっても、サイヤ人てわかりにくいよな」

だって最盛期に不老って、サイヤ人、若い時間長いからわかんないし。
まぁいいや。さっそく修行でもしようかな？　早く界王拳覚えてぇ……。

俺はカプセルより人工重力装置付き半球型の建物を取り出すと、修行を始めた。
ちなみにこの建物には風呂やベットなど、設備は完備されているので結構便利である。

続く

第7話　修行、からのぉ――…龍樹ッ！（前書き）

めっちゃ長くなった気がする。

あと今回の話でアーティファクトの事が判ります。

さすがにドラゴンボールがあると、チートすぎますし？

作者でも、その辺は考えてありますのでご安心を。

第7話　修行、からのぉ――…龍樹ッ！

――――――

まぁ気を取り直して、説明へといこう。

……

……

……

……

……

……

さて、俺が十二年のあいだにやったことといえば、アーティファクトの詳細の確認、十二年間ぶっ続けで年々増えていく重力の中での生活、そこからの厳しい修行など色々やってきた。
そしてわかったのが、アーティファクトの厳しい制約である。

まず第一に、一番問題だったドラゴンボールだが、一年を過ぎても石化が解かれることがなかった。
別荘に入って丁度一年経った頃、一度ドラゴンレーダーで調べてみたのだが、レーダーには何も映されなかった。
あれ？　おかしいな……と思いながらも、本格的に重力修行をする前に食料調達時に偶然拾った、ドラゴンボールらしき丸い石を調べてみた。

つんつんと突いてみたり、思いっきり壁に投げつけてみたり、「タッカラプト　ポッポルンガ　プピリットパロ」と言ってみたり、色々試してみたんだが石のままだった。
ムカついたので、うぉぉぉぉぉぉッ！　と叫びながら、石に気を送ってみると、ホワァと淡く光った。
あれ、これ効果あんじゃね？　みたいな感じがしたので、修行を続けながら一年間気を注いで見た。
すると、あら不思議、石が少しガラスのような材質に！　といってもまだまだ石っぽかったんだけどね。

なのでその後、一度だけ建物から出て、島中を探しまくりました。
あの小さな丸い石を。

正直しんどかった。だって何処にあるかわかないし。
しかし四つ目ぐらいから、周りに気を発すると石が淡く光って反応することに気が付いた。
……最初に気を流した時、淡く光ったんだから気がつけよ、と言うかもしれんが、俺はバカなので気が付きません。
そしてそこからは発見するスピードも少し早くなり、約半年ほどで全部見つけた。

建物に帰った後は、そのまま修行の合間に気を流す作業をいままで続けてきた。
現在の復活度は５０％ぐらいだろうか、半透明な感じのドラゴンボールがある。
やはり強すぎる力には制約がつきものだろうな……まぁこれからは使わんと思うけど。

そして次に仙豆など消耗品。
これもドラゴンボールと同じで、気を流すと数が増えていった。
消耗品は仙豆を入れる袋などが本体らしく、袋に気を流しつづけると豆が増えていった。
ドラゴンボールよりかは短いが、一つ増やすのに一ヶ月ほど掛かった。
ＰＰキャンディーも同様で、一つ一ヶ月ほど掛かった。

タイムマシンも同様で、気を流すことによってエネルギーが蓄えられるらしい。
ただしその量は膨大で、ドラゴンボールより溜まり方が超おそい。
十二年間、気をながしているが、まだ１０％にも及んでいない。
超が持つカシオペアみたいに、世界樹の魔力を利用すれば、直ぐに時を越えれるかもしれない。

冷凍カプセルもエネルギーがいるようだが、これはあまり気を使わないっぽい。
ミクロバンド、変身スーツ＆バンドは使った本人から自動で、気または魔力を吸い出すらしい。

人工重力装置の付いた半球型の建物はとくにエネルギーとかは吸われていない。
もしかしたら空気中の魔力をエネルギーとして吸っているかもしれんな。

ちなみに筋斗雲、如意棒は普通に使える。来いと呼べば来るし、伸びろと言えば伸びる。
初めて如意棒を伸ばした時は、普通に感動したね。思わず叫んじ

ゃったよ。
筋斗雲も自分の気を使わないから、移動するとき便利だし。
みんな知らないかもしれないけど、舞空術っておもいっきりとばすと、結構、気つかうんだぜ？
筋斗雲って思ってたより速いしね。ジェット機より普通に速いのは、ヤバイよ。

――――閑話休題――――

さてアーティファクトの話はここまでにして、修行の話をしようか。
この十二年間の修行は、最初は型の練習や基礎的な動きの反復。
中盤前半から界王拳や技の練習。中盤後半は悟空がナメック星に行くときやっていた、自分に気功波を当てて一度死にかけてから↓仙豆の繰り返し。最後はそれを踏まえての技の練習。

最後ぐらいになると、重力は３００倍になり、俺の身体は界王拳５０〜６０倍ぐらいまでなら耐えれるようになった。
しかし正直言って、これでも帝都守護聖獣である龍樹に勝てる自信はない。
だってあのバグのラカンと引き分けになるような存在だぜ？　勝てると思うか？

そういえば言ってなかったが、俺の服は亀仙流胴着のままだ。
なぜか身体が成長するたびに服が大きくなって、汚れても次の日には綺麗になっている。
正直不思議すぎる現象だが、全然不便でもなんでもないので、俺としては最高だ。

とりあえず話もここまでにして、早速重力装置を切るとするか。

――――カチッ……ブウゥゥゥゥン……

「……あぁ……これはヤベェ……」

言葉がないくらい気分は最高だ。
自分の体重を感じないほど、俺の身体は軽くなっている。
……よし、あれやってみよ。
俺は転がっている石を持つと、前方へおもいっきり投げる。

――――シュンッ！

俺の右手には、先ほど投げた石が納まっている。
……おぉ……感動した。この速さは半端なく男心をくすぐる。

感動もいいが、そろそろ別荘をでないとテオにぶっ飛ばされそうだ。
というか入るとき無視したから、絶対ぶっ飛ばされるな、これは。

俺は荷物をすべてカプセルに戻すと、魔方陣にのって別荘の外へ転移した。

＝＝＝

ドイッチを頬張る褐色幼女がいた。
俺が近づくとテオも気づいたのか、少し目を見開きながらもサンドイッチを頬張っている。
……というかどんだけサンドイッチ頬張ってんだよ。とりあえず止まろうぜ、な？

「ふぁふぁふぇ！　いふ、ふぇふぇふぃふぁんふぁ！　（訳：ナガレ！　いつ出てきたんじゃ！）」

「いや、まず食べるか、喋るか、どっちかにしろよ。……あと質問に答えるならさっき出てきた」

「んぐんぐ……ごくん……ってわかるんかい！」

いきなりつっこまれた。

「なんとなくな。それ何個か貰っていいか？　ハラ減ってしょうがねぇよ」

「いいぞ。というかこれでは足りんじゃろ。追加で何か頼ませよう」

「すまんな」

「これも一応褒美に入っておるしの」

ちなみに褒美とは、テオを助けた時の褒美である。内容は二年間の食料の保証。

簡単に言えば、二年間帝国ではタダ飯を食えるということだ。

すると気になったのか、テオは俺の身体を上から下へと眺めながら言った。

「にしてもナガレ……おぬし結構成長したようじゃな」

「そりゃ別荘使ったからな。歳もとるさ」

つっても不老だし、元々サイヤ人って若い時間が長いからあまりかわらんとは思うけど。

まぁ１３〜１４歳から、いきなり２０代になってりゃ見た目も変わるか。そんなに自覚はないけど。

ちなみに身長は１５０ｃｍぐらいから、１７０後半〜１８０前半ぐらいまで伸びた。

あれ？　確認してみると、別荘に入る前と入った後じゃ、だいぶ見た目変わってるわ。

「いいのぉ……わらわも早く、ボンッ、キュ、ボンッのお姉さん

になりたいのじゃ」

大丈夫、あと二十年ぐらいすれば、綺麗なお姉さんになれるはずだ。

「まぁそう言うな。若いときにしかできない事もある」

「そうはいってものぉ……王族なんぞ、勉強ばっかりじゃ」

「はは、頑張れよ、お姫さま」

「筋肉バカは気楽でいいのぉ」

まぁ筋肉バカではあるが、そんなに直球でいわれると、さすがの俺も傷つく。

テオも王族なりの悩みもあるんだろうが、俺には解決できない悩みだな。

俺は運ばれてきた料理を、ドンドン口の中に放りこんで行く。

すでにテーブルにはお皿ツインタワーが建造されている。もう直ぐで三つ目も建造できそうだ。

俺がいないまに来たのであろうメイドさんは、そんな光景に唖然としている。

するとテオはテーブルにふにゃっと脱力しながら、俺に尋ねてきた。

「…それで龍樹には挑戦するのか？」

「もぐもぐ……んぐっ…ぷはぁ……もちろん！」

俺はチキンを片手に、テオに向かって右手の親指を立てる。

「そうか……いついくんじゃ？」

俺は右手を降ろして、チキンを食べながら考える。

「そうだな……明後日ぐらいには行ってみようかな」

「ほぉ……随分と早いんじゃな」

「早く戦いたくてうずうずしてっからな」

やっぱサイヤ人になってから、戦闘狂になった気がする。
まぁまだ軽いほうだから、戦闘狂とは言わないかもしれないが、
絶対戦うのは好きになったね。

「こちらからも龍樹には伝えておくからの、準備は済ましておくんじゃな」

「ああ、わかってる」

ああ～～～……早く龍樹とやらと戦ってみたいなぁ～～～。
やばぇ暴れたくなってきた。どうやってこの気持ちを納めようかな。

「テオ、どこか戦う場所でもないか？」

「へ？　……う～ん、そうじゃのぉ。最近、帝国の一部と『北の連合（メセンブリーナ連合）』の一部が、小競り合いをしていると聞いたのぉ。じゃからそこに行けば戦いがあるのではないか？」

それってもう少しで戦争が始まるって事じゃないか。
絶対裏に「完全なる世界」たちがいるな。早く強くならないとな……。

「……そうか。流石に国同士の戦いには、仕事じゃないと行けないから、せっかくだけど止めとくわ」

「そうした方がいいぞ。国同士の戦いなぞ、何か裏がありそうじゃ」

なんかテオさん、この戦いの核心ついちゃってんですけど。
裏ありそうって、実際あっちゃうから困っちゃうよね。知ってる側としては。
そういえばこの国にも「完全なる世界」のスパイとかいそうだな……潰すか？
いや、無理だな。潰したところで、また新しくスパイが来そうだし。
もし潰して俺の存在がばれると、面倒なことになりそうだ。絶対。

「まぁ龍樹と戦うのを待つとするかね…」

「それが一番じゃ」

俺は食後のデザートを食べながら呟いた。
デザート？　特大ケーキだよ。超甘いよ、これ。

＝＝＝

＝＝＝

……
……
……

龍樹の身体は、鎧のようなもので包まれていて、背中にある翼は飛ぶように作られているとは思えない。魔力か何かで飛んでいるのであろう。頭の上には二つの角が後ろに流れるように生えており、いかにも龍という感じがたまらなくカッコイイ。

俺もどっかで龍でも狩って、ペットにしてやろうか。できるものならしてみたい。

――グルゥ……

へ？　はやく戦わないのかって？　やってもいいならやってやるよ。

――ガルゥ！

掛かって来い、小僧？　ぶち殺してやろうか、この龍……。

俺も早く戦いたくって、ウズウズしてんだ。やろうぜ――…龍樹さんよぉ…。

――グルォォォォォォオオオオオッ！！！！

「うぉぉぉぉッ！！！　界・王・拳ぇぇぇぇぇぇんッ！！！」

俺は最初から全力全開、フルパワーの界王拳６０倍でいく。
俺が界王拳を発動させると、身体中の筋肉は膨張し、噴出す赤く染まった気により髪がなびく。

「行くぞ……トカゲやろう」

――――グルァァァァ！！

俺は咆哮とともに体当たりをしてきた龍樹を、上に跳んでかわすと、舞空術で空中で止まる。
突っ込んできた龍樹はそのまま俺の後ろにあった大岩に体当たりし、辺りに砂埃が上がった。
さすがにこれでくたばる事はないので、俺は警戒しながらも連続で気功波を龍樹がいるであろう場所へ放つ。

――――ビュン、ビュン、ビュン、ビュン、ビュン

龍樹はその気功波を気にすることなく、砂埃が舞う場所から空へ飛び上がると、こちらへと口をあけブレスを放ってきた。
俺はそれを気合で吹き飛ばすと、一瞬で龍樹の腹の下へ移動すると、思いっきり右ストレートを叩き込んだ。

流石に固くて鎧的なものが壊れることはなかったが、衝撃により龍樹は後方へと吹き飛ぶ。
俺はその隙を見逃さず、追い討ちをかけようと、龍樹に近づいた。しかし龍樹の罠だったのか、俺が近づくとくるりと体を回すと、その勢いを利用して長いシッポを俺に叩きつけてきた。

モロに受けた俺は凄い勢いのまま飛ばされていくと、硬そうな大岩にぶつかり、そのまま岩を砕くと岩の中に埋もれてしまう。

「!?　……がっ…は…」

肺の中の空気が一気に吐き出された俺は、口から血をはきながら、息を整える。
しかし龍樹は時を待たず、追撃を加えようとこちらにブレスを吐き出してきた。
俺は岩を無視して急いで上に飛び上がり、ブレスをかわそうとする。
ギリギリのところでかわした俺は、ブレスによって吹き飛ばされていく岩たちを確認しながらも、目の前の強者から目を離さない。
隙を見せれば一瞬でかたがつく、そんな感じの空気が俺の周りに

漂っている。
おもしろい……俺は単純にそう思った。このリアルさが俺に刺激を与えてくれる。

「……でも、さすがに龍樹は強いな」

どうこの状況を打破するか、どうすればコイツに勝てるのか。

「とりあえず、当たって砕けろだッ！！」

俺は考えるのを止め、龍樹の元へと飛んでいった。

……

……

……

……

……

……

……

そして6時間後、戦いはまだ続いている。
どちらも余力は十分に残っており、まだまだ決着がつく気配はない。

「太陽拳ッ！」

俺の身体から目が痛くなるほどの光が噴出す。

――――グルォォォォ！！

この戦いで初めて使ったので、一応効いてくれたようだ。
俺は稼いだ時間を無駄にせず、技を発動するため構えをする。

「効くかはわからんが、行くぞッ！！　か～～、め～～、は～～、め～～～……」

これは普通のかめはめ波ではない。
かめはめ波の第二段階目、『超かめはめ波』だ。
これをヘラス帝国の帝都に使えば、普通に街は消し去ることができるだろう。
まぁ使う予定はないので、安心して欲しい。

「――――波ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！！！」

俺が両手を前方に突き出し、溜めに溜めた気を一気に放つと、極太のかめはめ波が龍樹を襲う。
超かめはめ波が龍樹に直撃すると、貫通はしなかったものの、そのまま龍樹は後方へとかめはめ波と共に吹っ飛んでいき、山の麓にある遺跡――龍樹の住処なのだが――にたつ太い石柱にぶち当たると、石柱が衝撃で崩れ、龍樹の身体の上に降り注いだ。

これはやったか？　と思っていたのが油断だったのか、突然、崩れた岩の中から極太のビームが飛び出してきて、とっさに左腕でガ

ードしたが俺の身体にモロに直撃した。
やべぇと思ったが、そのまま吹っ飛ばされて、二、三回地面を跳ねると地面に転がる。
痛みで薄れてきた思考を働かせて身体の状態を確認する。

身体全体の火傷、および肋骨三本の骨折、ガードした左腕は特に酷く少し骨が見えていた。
きもっ！　流石に骨が見えるのはちょっと……。と、少しふざけてみるが、気分はまったく戻らない。

くそっ！　ここまでかと思ったが、俺の頭に名案が浮かんだ。
とりあえず隠れないと……。

||||||

山から飛び出ると、回りを確認する。
しかし流の姿は見当たらない。グルゥ？　と疑問に思いながらも、流を探す。
いっこうに姿を現さない流に、龍樹はあたりにブレスを吐こうとした矢先、流が姿を現した。

「ようトカゲ……身体の調子はどうだ？」

いきなり話かけてきたが、勝負中に会話は要らない。
龍樹は口をあけると、流にむかってブレスを放つ。
ブレスは流に迫ると、そのまま当たった。しかしブレスが当たった流は吹き飛ばされることなく、消えた。
突然のことに驚く龍樹、しかし周りはすでに囲まれていた。

「分身……いや、実体があるし影分身て言った方がいいか……」

「でも、それがお前にわかるか、俺にはわかんないけどね」

「まぁ戦うならこれの方がいいだろ？」

「じゃあさぁ――――…」

「「「「「――――殺りあおうぜ、トカゲやろう……！！」」」」」

そこには四人に増えた、流がいたのである。

続く

第7話　修行、からのぉ――…龍樹ッ！（後書き）

ちなみに流の名案は、影分身ではありません。

次の話でわかると思うので、その辺はお楽しみに。

まぁわかる人は、わかってると思いますけど。

第8話　傭兵（前書き）

すこし短い気も――…するけど、きにしないで！！
作者のライフは、もうゼロよッ！

第8話　傭兵

さて、ここはヘラス帝国中央にある城のある一室。
俺は、体中包帯まみれでベッドで寝かされていた。

「ちくせう。龍樹のヤロウ、次はぶっ飛ばす…」

一瞬、「あれ？　一話とんでる？」とか思っただろう？
違うんだなこれが。決して作者が「あれ？　ちょっとめんどくせー」とか思った結果じゃない。
……まぁこれからあの後のことを説明してやろう。といっても簡単にだがな。

あの後、影分身？　４体で龍樹を攻めていた訳よ。それで勝てるとは思ってないし、つーか囮だったしね。本体は別にいて、実は元気玉を作っていたんだけど……まぁやっぱ見つかるじゃん？　それでちょっと小さかったけど、元気玉を龍樹にむけて放ったんだ。そしたらあっちも対抗してきて、破壊光線的なものを放ってきたわけだ。最初は拮抗してたんだけど、やっぱ未完成だし？　それにぜんぜん小さいし？　普通に破壊光線に巻き込まれたわ。まるで悟飯のかめはめ波で消滅したセルみたいだったよ。セルの気持ちがわかっ

た気がする。

てな感じで結局負けたわ。
仙豆はって？　そんなモンつかったら面白くねーだろーがッ！
サイヤ人の戦闘本能舐めるなよ？　楽しく戦うことが一番じゃいッ！！

「なに言ってるんじゃ……妾が様子を見にいかなかったら、危なかったではないか」

「いやいや、そんな簡単に死なねーよ」

聞いた感じでは、殆ど死んでんじゃね？　ぐらいの状態で倒れていたらしい。
サイヤ人だし。というか死にかけて復活したから、逆に強くなったわ。マジすごいね。

「ま、これに懲りて、当分の間は修行でもするんじゃな」

「言われなくても、今まで以上に頑張っていくさ」

にしてもやっぱ強いわ、龍樹。ラカンもよく引き分けたな……バ

グめ。
つっても？　まだまだ時間はあるし、修行頑張っていくしかないか。

「修行はべつとして、これからどうするんじゃ？」

「そーだなぁ……」

う～ん…どうしよっかなぁ…なんか物語上、事件とかあったっけ？
そういえば戦争があるな……よし、ちょっと戦場でもうろつくか。

「テオ、俺、旅出るわ」

「いきなりじゃのぉ…なんでじゃ？」

「戦争でも始まりそうだし、適当にぶっ飛ばしてくるわ。それに軍隊みたいな人数との戦闘ってやったことなかったから、戦ってみてーし…」

「はぁ…ほんとに戦闘バカじゃな、おぬしは…」

「褒めんなよ」

「褒めておらぬわッ！！」

いやいや、サイヤ人的には褒めてることになんじゃね？
モノホンなサイヤ人ほど凶暴でもないから、それほど戦闘狂でもないと思うんだけどね～。

「まったく……とりあえず何をするにしても、ケガを治すことじゃな」

「わかってるよ」

テオはそういうと用事があるからと言って部屋を出て行った。
ケガといっても、すぐに治るだろ。サイヤ人の体って、なんか治癒能力高そうだし。

にしても戦争か……面白くなりそうだな。

＝＝＝

ヘラスを出てからは傭兵として活動している。
クエスト受けて、任務を遂行して、お金を受け取る。そんな感じ。
いまは戦時中だから、傷ついた人のために薬草をとってきたり、武器を作るための鉱石を調達してきたり、物資輸送隊の護衛だったりと、戦う以外にもたくさんのクエストがある。

俺は護衛対象に長期的に着いていくのが面倒なので、主にやっているのは戦場で戦うこと、その補助程度に薬草や鉱石を調達したりしている。

てな感じで傭兵生活を満喫？　しているわけだ。わけだが――……

「なにを言ってるおるのじゃ、主は」

「なんでもねーよ姫さん」

なんかいたんだよねー、アリカ姫。
俺は傭兵だから金を多く積まれたほうに味方するから、あっち来たりこっち来たりで、まぁ両方の陣営にいたりいなかったりするわけよ。つっても強そうなやつがいれば、いくら金を積まれようとも強そうなやつがいる陣営の敵になるわけだが。

そんな感じで今回はヘラスのほうでぶらぶら～としていたんだが、なぜかいた。姫さんが。

いや実際姫さんを見たことなかったから、最初はこいつ誰だよッ！ ってな感じだったんだが、聞いてみるとウェスペルタティア王国の姫さまで名前はアリカ・アナルキア・エンテオフュシア。まさかのアリカ姫登場に全俺が驚いた。

用件は調停役として戦争を終わらせに来たらしい。まだ火種は小さいが、少したてば大きな戦争となると予想して、早めに終わらせようとしたとか。でも失敗に終わったってよ。

まぁそんな感じでその後、俺が強そうだという勘とも言える理由で俺を雇い、俺は姫さんのもとで調停役として働かせてもらっている。

「で、次はどうするわけよ。戦場に殴りこみでも行くか？」

「いや、まだ武力介入ははやい。まずは話し合いで決めるのじゃ」

「つってもねぇ――…」

帝国も連合も話し聞こうとしないからなー、どうしようもないと思うけど。

「わかっておる。いずれ武力でかたをつけることになるじゃろう。

その時は頼むぞ」

「仕事はちゃんとするさ」

あぁ、早く暴れたいな――とか思ってるけど我慢はするさ。

「というより、ナガレよ。最近食費がかさむんじゃが…」

「ある程度自給自足してるぶん、まだマシなほうだ」

そして火種は姫さん予想通り大きくなり、帝国、連合が本格的に対立したのち、大規模な戦争が始まる事となった。

続く

第9話　紅き翼との接触（前書き）

けっこー久しぶりに投稿した。
まぁいい感じだと思うので、よろしく。

第9話　紅き翼との接触

「波ぁぁぁぁぁ――ッ！！！」

――――チュドォォォォォォンッ！！

俺がかめはめ波を放つたび、敵兵が突風に煽られた枯葉のように吹っ飛んでいく。こんな光景も最初のころは驚かれたが、いまでは見慣れた光景として特に驚かれはしない。それに達人級の奴らにとっては少し本気を出せば出来ることなので、別に俺が最強ってわけでもない。まぁ世界的に見れば上のほうではあるがな…。

「誰か奴を止めろ！」

「し、しかし、『猿人王』相手では……」

相手側の指揮官が何やら言っているが関係ない。俺を止めるとか、

ラカンぐらい連れてこなきゃ止められるはずがない。つーか、猿人王とか言うな。確かに尻尾あるけど、一応人種的にはサイヤ人です。まぁ言っても証拠がないから意味ないけど。

「おらおらおらぁッ！！　どいつでもいいからかかって来いやァ！！」

俺が挑発するが、どいつもビビッてんのか挑んでこない。

「……チッ…しょーもねェ……早めに終わらすか」

ふんッ、と体に力をこめると界王拳１０倍まで高める。体の周りをを真っ赤な気が包み込むと、筋肉が膨らみ、服を押し上げる。

「行くぜ？　玉無しども……」

ちなみにここはヘラス帝国南部にあるシルチス亜大陸、その南東に位置する……なんたらハフトとかいう都市である。名前は気にならないのであまり覚えていない。

＝＝＝

「そう言うなよ。仲良くなったと思えや」

「ムッ…まぁ、それもそうじゃな……」

まったくお固い頭をお持ちで。もっと柔軟に生きていってほしいもんだね。

「……で、戦渦は広がっていってるわけだが、どうすんだ？」

「私もその事を考えていたわけじゃが、ヘラス帝国の第三皇女と密談する事になった」

「第三皇女？」

第三皇女……なんか引っかかるな。誰だったっけ？

「テオドラ殿じゃ」

「ああ……あいつか」

あいつそういえば皇女だった。お転婆すぎるから皇女って感じしないし、記憶に残らなかった。

「なんじゃ、知っておるのか？」

「姫さんと会うまでは帝国の城でお世話になってたからな」

「何故それを私に言ってない……」

「いや～、別に隠す気はなかったけど、聞かれなかったから……」

「……まぁ良い。一ヶ月後に会うことになっておる。主は私の護衛として着いてきてもらう」

つーことは、テオと久しぶりに会うことになるな。ま、あいつは変わってねーだろな。

「うぃ、わかった。準備しとこう」

姫さんはもう言うこともないのか、部屋から出て行こうとする。

「怠らぬようにしておけ。それと事前にある協力者と会うことになっておる」

「ふ～ん、誰なんだ？」

姫さんはドア手前で振り向くといった。

「――紅き翼、とかいったの」

＝＝＝

紅き翼のリーダー、ナギ・スプリングフィールドは少しメンド臭がりながらも、元捜査官であるガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグに今回の召集内容を尋ねる。

「会ってほしい人がいる。協力者だ」

「協力者？」

ナギは疑問に思う。

「そうだ」

聞いたことのある声に紅き翼のメンバーは皆振り返る。

「マクギル元老院議員！」

「いや」

わしちゃう、と言いながらもマクギルは後ろに視線を向け言った。

「主賓はあちらのお方だ」

視線の先を見てみると、フードをかぶった女性らしき人と、同じくフードをかぶったガタイのいい男性が階段を上ってきた。

「ウェスペルタティア王国……アリカ王女」

「……」

「ん？」

ナギはアリカ王女に見惚れ、ラカンはその様子をを見てぬふふと顔が笑っている。

ラカンは少し笑いながらもアリカに近づいていくと話しかけた。

「よう、王女サマ。なかなかイイ女じゃねーか」

アリカはラカンに視線を向けると、無表情のまま言い放った。

「気安く話しかけるな、下衆が」

ラカンもあまりのことに固まったが、一瞬でニヤニヤしだした。
するとアリカの後ろにいた男性が動き出し、あれ？　ラカン殴られんじゃね？　とほかの面々が思っていると、男性はアリカの後ろに立ち腕を振り上げた。

「あーんパーンチ」

「あぶしッ！？」

そのままアンパン的なヒーローの掛け声をしながら、腕をアリカの頭の頂に振り下ろした。

「「「え――――ッ！？　そっち――――ッ！！？」」」

まさかの暴挙に周りの人間はもちろんアリカ本人も驚いていた。
ちなみにアリカはあまりの痛みに、しゃがみながら頭を両手で抑えている。少し涙目をしながら上目遣いで男性のほうを見ているのは……萌える。

「姫さんよ～その言い方は駄目だよな～。仮にも協力者だぜ？」

「しかし…」

「しかしもお菓子もねーよ。確かに下衆でボケで筋肉馬鹿だけど、そこは許してやれよ」

「いや、主の方が酷くね！？」

流石の言い様にアリカが壊れた。

「確かにお前の方が酷いな。お前が俺の何を知ってんだよ」

ラカンもそこまで言われては、キレるとは言わないがムカムカはする。

「あぁ～？　なに言ってんだ、お前。ダチの顔も忘れたっつーのか？」

「ダチ？」

男がフードを下ろすと、ラカンの顔が驚愕の色に染まる。

「まさか……ナガレか？」

「正解、ということで殺す」

「何で！？」

――どきゃぁぁぁん！！

ラカンは吹っ飛んでいった。

＝＝＝

「うるせェ、もっかいぶっ飛ばすぞ」

「噂には聞いてたが、強くなってんな。勝負しようぜッ！」

「話を聞いちゃいねェ……つーかお前も強くなってんだろ」

「なーに言ってんだよ、お前と戦えば……」

少し離れたところではナガレとラカンがギャイギャイと騒いでいる。つってもラカンが一方的にギャイギャイ言ってるだけで、ナガレのほうはあまり騒いではない。

「……しかしよ、なんでナガレがウェスペルタティアの王女といるんだよ」

「あぁ？　……あ～…偶々戦場近くの街で出会ってな。調停役してるとかで、護衛がほしかったって言ってたんだよ。そんな感じだな」

「ふ～ん、そんなこともあんだな『猿人王』」

「……殺す」

「ちょ…おま…」

ラカンは吹っ飛んでいった。

……

……

……

……

……

……

……

“帝国”と“連合”
二つの巨大勢力に挟まれて翻弄され続けてきた王国の王女
『アリカ・アナルキア・エンテオフュシア』

彼女は自ら調停役として戦争を終わらせようとしたが失敗。力及ばす今回、紅き翼に助けを求めにきた。

「要するに戦争をやりたいやつらがいるんだろ。まーた『あいつら』か！？」

「『完全なる世界』……帝国・連合だけでなく、歴史と伝統のオスティア内部にまで、シンパがいるようだ」

「世界全てが彼らに操られているようです……やはりこれは思った以上に根が深い」

俺は紅き翼が話しあいをしているのを離れたところから聞いている。こいつ等は『完全なる世界』のことを死の商人や国際マフィアだと思っているようだが、そいつらに世界を動かすことは無理だ。

「ま、俺には関係ないな」

俺にとっちゃ相手を潰せれば、国際マフィアだろうが死の商人だろうが関係ねェ。敵と判明した奴らをぶっ飛ばせばいつかは終わるさ。といっても俺はわかってんですけどね、敵の正体。パッと終わっても面白くないから言わねェけど。

その後、紅き翼の頭脳派たちは『完全なる世界』についての内偵、調査向きではないラカン・ナギはバカンスか、首都での休暇を楽しむか、だ。

ちなみに俺は何をしているか、というと……

「何をしておるんじゃ、ナガレ。早く行くぞ」

「…はいはい。わかりましたよ、お姫サマ」

……アリカとの買い物だった。つーかナギよ、もっと頑張れよ。お前身長の二倍のある荷物持ったことあるか？　ちなみに俺はいま持っている。まぁ俺の身体能力を駆使すればふらつきもしないがな。

「あれはなんじゃ」

「しらん」

「あれは？」

「しらん」

「あれh」

「しらん」

「……」

「ん？　なんだ？」

黙り込んだアリカのほうを見ると、唇を尖らせてすねている。萌えた。

「……なんで何も知らんのじゃ」

「メガロなんて来た事ないからな」

「なんじゃ、そうならそうと早く言えばよかろうに」

「聞かれなかったからな」

「主はそればっかりじゃな……」

アリカは少しくたびれているが、そんな細かいことは気にすんな。

――と、まぁ平和な空気が流れているが、凄く不穏な気を感じる。

どこだ……屋根のうえ、路地裏、広場の中、どこを探しても不審な奴は見えない。殺気は感じるが、場所までは特定できない。

「――…契約に従……に従え、炎の覇……たれ……化の炎、燃え盛る大……ほとば…」

群衆の中から聞こえてくる、小さな声での詠唱を逃さなかった俺の耳。
しかし詠唱はほぼ終わっている。肝心の詠唱者は――…

「……ムを焼き……と硫黄。罪あり……を、死の塵…」

――…あそこか

「アリカ！　伏せてろ！」

「『燃える天空』」

||||||

がちゃ、と扉の開く音ともに部屋に入ったのはラカン。一番に目に入ったのは書類を手に唸っているガトウの姿だった。

「まさか…こんな……」

「よぉガトウ、どうしたい。深刻な顔してよ」

ラカンはわき腹をボリボリ掻きながらガトウに尋ねる。

「ああ、ラカン。いや、遂に奴らの真相に迫るファイルを手に入れたんだが」

ガトウは書類に視線を向けると、説明を続ける。

「これがどうにも信じがたい内容でな。いや情報ソースは確かなんだが…う〜む」

ガトウの顔色は元々悪いがさらに悪くなっている。

「信じていいんだか悪いんだか……しかしこれが確かなら奴らの行動も…」

「んだ、ガトウ。ハッキリしねぇな。もっとわかり易く言えや」

「いや、言ってもあんたにゃ興味ない話だよ、多分」

ガトウは一枚の書類を取り出すと、ラカンに見えやすいように机の上に置いた。

「それよりこっちの方が深刻だ。この男にも『完全なる世界』との関連の疑いが出てきた…大物だよ」

「こいつは……！？」

ラカンはあまりの内容に驚愕した。

「今の執政官じゃねーか！！　このメガロメセンブリアのナンバー2までが、やつらの手先なのか！？」

「確証はない。外で喋るなよ？」

―――ズズンッ

突然、何かが爆発したような音が響き渡る。

「!?」

「何だ!?」

首都のほうを見れば、一部で轟々と炎が燃え盛っている。
爆弾では出せない、魔法での爆発。その様子がここから良く見えた。

||||||

「ちッ！　……めんどクセェことしやがる。死人はいねェだろうなァ」

確認できる限りの住民は分身して逃がしたが……まぁどうかはわからんな。

「大丈夫か、ナガレ！」

「あぁ？」

振り向いてみると、そこにはでかい杖持ったナギがいた。

「大丈夫に決まってんだろ？　つーか何でお前がいる」

「えッ！？　ま、まぁ偶々買いモンに出てただけだぜ！」

焦りすぎだろ、コイツ。まぁナギが着いてきていたのは知ってたがな。アリカは流石に気づかなかったけど、俺は一応プロだしな。気づかないわけがない。

「まぁいい。お前は魔法使いの方を追跡してくれ。どうせ追尾魔法はかけてんだろ」

「ああ、それはそうだけど……」

ちらちらアリカのほうを見るな。

「早くいけ。俺は護衛として姫さんを連れて行かなきゃいかん」

「わかった……」

少し落ち込んだな。ナギ、ざまぁ。

ナギが浮遊魔法で飛んでいくと、少し離れたところから、俺の分身と一緒にこちらに向かってきた。

「敵はどうなったんじゃ？」

「いまナギが追っている。姫さんは一度アジトまで戻るぞ」

「……私も行きたいが、ナガレは許してくれんのじゃろ？」

「当然、何のための護衛だ」

その後、ナギが持ち帰ってきた確たる証拠を使い、アリカと俺は第三皇女との密談、紅き翼の面々はマクギル議員に報告、弾劾手続きするということで法務官に会うためマクギル議員の執務室に行くことになった。

ここから時代は、急速に、動き出す――…

続く

第１０話　『完全なる世界』

今回の密談は、ヘラス帝国の敵であるメセンブリーナ連合の連中に見つからぬよう、オスティアと帝国の間にあるニャンドマという都市部に、隠れながらもやってきていた。連合に見つかると、中立のオスティアが帝国側につくんじゃないかと疑惑を持たれるので、今回のように隠れて、決して見つからぬようにしていた。

といっても帝国もオスティアも『完全なる世界』の内偵が潜り込んでいると予想、つーか確定されているので安心など出来るはずもないわけだが……。

ニャンドマではあるボロ宿屋の一室を借り受け、そこで我が雇い人であるアリカと、元雇い人のテオが交渉していくわけだ。普通ならこんな場所で密談をするなどと、思うはずがない。普通なら、な……。

「そっちは追跡されていないな？」

「……ええ、私が認知できる範囲ではいないはずです」

テオ側の護衛官に聞いてみるが、こんな言葉に安心できるほど馬鹿でもない。こいつだって俺がいたときには、見たことのない護衛官だ。新しく護衛官として任務に就いているだけかもしれんが、『完全なる世界』に送り込まれた手先という可能性もある。

「さっそくで悪いのだが、話を始めたいと思う。よいか？」

「それで構わんのじゃ」

アリカは早速話を切り出すと、二人で難しいことを話し始めた。内容がわからないという事はないが、王族としての勉強をしてきた二人の話は、元高校生には些か難しい内容だった。といってもテオは結構、勉強から逃げていたのだが……。

「……裏……ごく…しか……じゃな……」

「……いや……これ…あ……かのぉ……」

はぁ……ねむぃ。俺は何でこんな所にいるんだろ……。テオがこちらをちらちら見てくるが無視だな。相手すんのもめんどクセェ。

ということで、俺は壁に寄りかかると目を瞑り、浅く寝ることにした。寝ながらも気配を察知できるので、これなら敵が来ようが、魔法を放たれようが、俺がやられることはない。では、お休み……Ｚｚｚ…。

……

……

……

……

……

……

……

「な、なにをすんじゃ！」

……ん？　なんか騒がしいな……俺の眠りを妨げる奴は誰だ？

「テオドラ様。少し黙ってもらえますかな？」

瞼を上げてみると、そこには護衛官によって捕らえられているテオドラの姿があった。首元には剣先が添えられている。

「おぬし何をしているのか、わかっておるのかッ！」

テオドラの問いかけに、護衛官は口を三日月に歪めながら言う。

「わかっておりますとも。……ですが私には私の任務がありますので」

「任務？」

「ええ。テオドラ様、及びアリカ王女の捕縛。抵抗するならば手足を千切ってでも捕縛せよ、とね」

「……おぬし、だれの差し金じゃ」

くくく、と薄く笑いながら、護衛官は言った。

「――…『完全なる世界』ですｙ「はい、終了〜」ぐぅッ！？」

――ズゴォォン

「…ぐ…ぁ…は……」

「雑魚がいきがってんじゃねーよ。そこでオネンネしときな」

宿の壁にぶち当たり、あまりの衝撃に崩れ落ちる護衛官。その護衛官の視線の先にはナガレがいた。
つーか、宿の壁どうしよう。

「……それで、どうするんじゃ、ナガレ？」

今まで黙っていたアリカは俺に問い掛けてくる。

「…そうだな。とりあえず紅き翼の隠れ家まで戻ろう」

「そうじゃな。あやつらも狙われている可能性があろうから、隠れ家に避難しているかもしれぬ」

……いつも思うが、姫さんの推理は大体あってるよな。コ〇ン君なみの頭脳してんな。

「じゃ、行くか」

「ナガレ～～～、怖かったのじゃ～～～！」

そのまえに足に抱きついて、涙や鼻水やらを出しているテオを引き剥がすとするか。

＝＝＝

タルシス大陸極西部オリンポス山『紅き翼』隠れ家。

「何だ、これが噂の『紅き翼』の秘密基地か！　どんな所かと思えば…掘立小屋ではないか！」

「贅沢言うな、テオ。これでも屋根と壁があるだけマシだろう」

「なんだぁこのジャリはよ。俺ら逃亡者に何期待してんだ……つーか、ナガレ。おめぇが一番ヒデェ」

「事実を言ったまでだ、筋肉」

「既に名前でもねェッ！？」

「名前で呼ばれたかったら、もっとマトモな行動をするんだな」

「そうじゃそうじゃ、この筋肉！」

「ぶっ殺すぞ、このちんちくりんッ！」

「何だ貴様！　無礼であろう！」

「へっへ～ん！生憎ヘラスの皇族にゃ、貸しはあっても借りはないんでね」

「なにぃ！　貴様何者だ！」

――ギャイギャイ！！　べろべろば～～～

あそこまで少女と言い争える筋肉もいないだろう。あの筋肉、マジで小学生レベルの思考能力だな。

「あのやけに元気な少女が……」

「ええ、ヘラス帝国第三皇女ですね。まさに幼女」

「……」

幼女言うな。

「で、わかっていると思うが姫さん。連合にも帝国にも……それにあんたの国にも味方はいねェ」

俺はアリカに問い掛ける。それに続くようにガトウは言った。

「恐れながら事実です、王女殿下。殿下のオスティアも似たような状況で……最新の調査ではオスティアの上層部が最も『黒い』……という可能性さえあがっています」

「やはりそうか……我が騎士よ」

「騎士じゃねーよ」

「そんなことどうでもよい。どのみち主は傭兵じゃ。ならば主は雇い主である私のものじゃ」

それどんなジャイアニズム？

「連合に帝国……そして我がオスティア。世界全てが我らの敵という訳じゃな」

アリカは顔だけをこちらに向けると言った。

「じゃが……主と我らの仲間の『紅き翼』は無敵なのじゃろ？」

「俺は無敵だが、こいつらは知らん」

「世界全てが敵――良いではないか。こちらの兵はたったの８人、だが最強の８人じゃ」

アリカは話を聞かない。まぁ前に、ある騎士物語にでる姫と騎士に憧れているとか言ってたし、この状況に酔ってるのかねェ。興奮してるのかちょっと頬が赤いし。

「ならば我等が世界を救おう。我が騎士ナガレよ、我が盾となり――…剣となれ」

アリカはこちらを向き、透き通るような声で宣言した。

「……ふ」

……まったく困ったもんだね。俺のご主人は。

「報酬は弾んでもらうぜ？　アリカ姫」

アリカは剣を胸の前に掲げる。俺もアリカの前に跪くと宣言した。

「いいぜ。あんたが生きている限り、俺がアリカを守ろう」

アリカは俺の右肩に剣先を触れさせる。その光景はちょうど出てきた朝日と交わり、まるで一枚の絵画のようだった。

「……なぁなぁ筋肉。わしもナガレを騎士にしたいのじゃが……」

「あとでナガレにでも頼め」

おまえら空気読め。

＝＝＝

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

「今更俺らを舐めてるとかありえんだろ。もっと罠とか奇襲に気をつけろ、筋肉」

「まだ筋肉！？　そろそろ名前で呼ぼうぜッ！」

英雄になったら呼んでやろう。まだ弄り倒してないし。

「ナガレ殿！　帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました」

「了解」

にしても若き総長は初々しくていいねェ……またアリアドネーでも行ってみよ。楽しそうだし。

「あんた達が外の自動人形や召還魔を抑えてくれりゃ、俺達が本丸に突入できる。頼んだぞ」

「ハッ！　それで、あの……ナガレ殿」

「どうした？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか？」

「ああ、そんなことか……別にいいぞ」

「尊敬していました」

ちなみにナギにも貰っていた。
そのすぐ後、空中に画面が出てきてガトウの姿が映った。

「連合の正規軍説得は間に合わん。帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう。決戦を遅らせることはできないか？」

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

つーか連合もメンド臭い奴らだ。そのくせ決戦が終わった後に、オスティアの保護とか言って占領紛いのことするし、腐ってやがる

な上層部……いっそ潰すか。連合。

「ええ、彼らはもう始めています…『世界を無に帰す儀式』を。世界の鍵『黄昏の姫御子』は今、彼等の手にあるのです」

アルの真剣な顔を見ても、なんか信用しきれないのはどうしてだろうか…。

「ああ」

ナギは不敵な笑みを浮かべる。

「よぉしっ野郎ども――行くぜっ！！」

紅き翼の面々は、ナギのかけ声とともに一斉に飛び出していった。

「……あの～、ナガレ殿はいかれないのですか？」

「俺？　俺は最初外だから。大体減ったら中に突入するけど」

「は、はぁ……」

「じゃ、一発ぶっ飛ばすから、味方を下げといて」

「わ、わかりました！」

よし、ということで久々に本気でも出しましょうかね……。

「ふんっ！！」

俺は両手を握りこみ、腰に構える。
俺は今まであった思い出を思い出しながら、感情を高めていく。
実力が足りず敗北した自分への怒り、初めて依頼を達成した時の嬉しさ、大切なものをなくした悲しさ、前世への未練、いろんな感情を思い出し、凝縮していく。

———ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！！

俺の体に金色の気が揺らめき始め、髪の毛が逆立ち始める。
そして気が最も高まった瞬間、俺は目を見開くと、感情を爆発さ

せた！

「ハァァァァァァァ――――ッ！！！！！」

――――ブゥワッ！！　ヒュンヒュウヒュン……

髪の毛が完全に逆立ち、金色に染まる。体からは溢れる気が炎のように噴出し、遠目からみる混成部隊の兵士達にはそれが神々しく見えた。

「……まだ発動するのに時間がかかるな……修行しないと」

「ナガレ殿……」

「ん？」

振り返ってみると後ろにはセラスがいた。

「どうかしたか？」

「あの、その……ナガレ殿、ですよね？」

「そうだが……それがどうかしたのか？」

「いえ、姿がかなり変わられたので……」

「まぁ、一族に伝わる秘術みたいなものだ」

サイヤ人ですけどね。一応伝説です。ちなみにスーパーな野菜人になれたのはけっこー偶々である。ラカンにご飯取られて、めっちゃ怒ってたらいつのまにか逆立っていた。

あ…ありのまま、起こった事を話すぜ！

『料理取られて怒っていたと思ってたら、いつのまにかスーパーな野菜人になっていた』

な…何を言ってるのか、わからねーと思うが、俺も何が起こった

のかわからなかった…。
大猿だとか野菜人だとかフリーザ様だとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…。
ま、そんなことは置いといて。

「じゃ、ちょっと離れとけよ」

「は、はい！」

俺はセラスが離れるのを確認すると、お馴染みの構えをする。

「死ねクズども――…か～～、め～～、は～～、め～～…」

俺が気を溜めるほど、手のひらの間からは目を開けられなくなるほどの光が漏れ出している。

「――――…波ァァァァァァァァァァァアアアッ！！！」

かめはめ波は両手の間から解き放たれ、そのまま直進すると、迫ってきていた敵のど真ん中に突っ込んだ。

――――ズズゥゥゥゥゥン……カッ…ドガァァァァァ――――…

見ろッ！　まるで敵がゴミのようだッ！　なんて言ってみる～…。

「にゃあぁぁぁぁぁぁ！？」

まぁ何故かセラスは後ろでオカシクなってるし？
う～ん……見た感じ大体全体の６～７割ぐらいは減ったかな？

「ここは任したから、じゃあねー」

「にゃあぁぁぁぁ……ってナガレ殿ー！？　行ってしまれるのですかあぁぁぁ……」

どんどんセラスの声が遠くなっていったけど、、まぁいいや。

「死ね死ねミサイル――――ッ！！」

中に突入するついでに潰しておくか。

……

……

……

……

……

……

……

「ふぅ……到着っと」

さっきなんか大きな音が鳴ってたけど、まぁナギ達ならボスを倒せるわけだし？　ほっといてもいいか……実際は倒せてないけど。

そういえば黄昏の姫御子とかいう女の子が捕まってるんだっけ？　アリカの妹らしいし、その子を探しに行けばいいか。えっと……大体の気はあっちに集まってて、一つだけ離れてるのがあるな。多分そこだな。よしいこう。

「はい、どーん」

俺は下に行くため、床を壊していく。これは仕方ないこと。あとから請求されても、俺のせいじゃない。

それから数分けっこー下のほうに行くと、なんか幼女が浮かんでいた。

「おー、いたいた。幼女、起きなさい。つーか起きろ」

———ぺしぺし

「……いたい」

「お？　起きたか幼女」

「あなた……ダレ？」

「ナガレって読んでくれ。お前は？」

「アスナ。アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア」

「うん、長い。アスナで」

流石になげーわ。もうちょっと短くしてもよくね？

「つーことで行くぞ」

「……どこに？」

「そとそと。ほら、敵来たら面倒だから早く行くぞ」

俺としては戦いたいけど、まぁアスナがいると危ないし。

「わかった」

アスナは俺の背中に引っ付くと、よいしょよいしょという感じで上ってきた。首に手を回すと、落ちないようにピタッとくっついている。

「じゃあ急いで出るから落ちんなよ！」

「れっつ・ごー…」

……なんかこのアスナちょっと違うくね？

俺はアスナが落ちないよう、ある程度のスピードを出しながら墓守り人の宮殿から脱出した。

その後聞いたんだが、紅き翼はアスナを探していたらしい。戻ってきたらアスナがいたので、何で言わなかったのかとみんなにボコられた。逆にボこり返したが。ちなみにアスナを連れて行っても術式は発動し続けていたので、アリカやテオドラ、ＭＭのリカードとか言う奴がなんか反転封印術式みたいなものを発動して止めていた。

あ、そういえば落ちるんだっけ？　オスティア……。

続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2795t/

超野菜人、魔法世界に参る

2011年12月10日00時49分発行